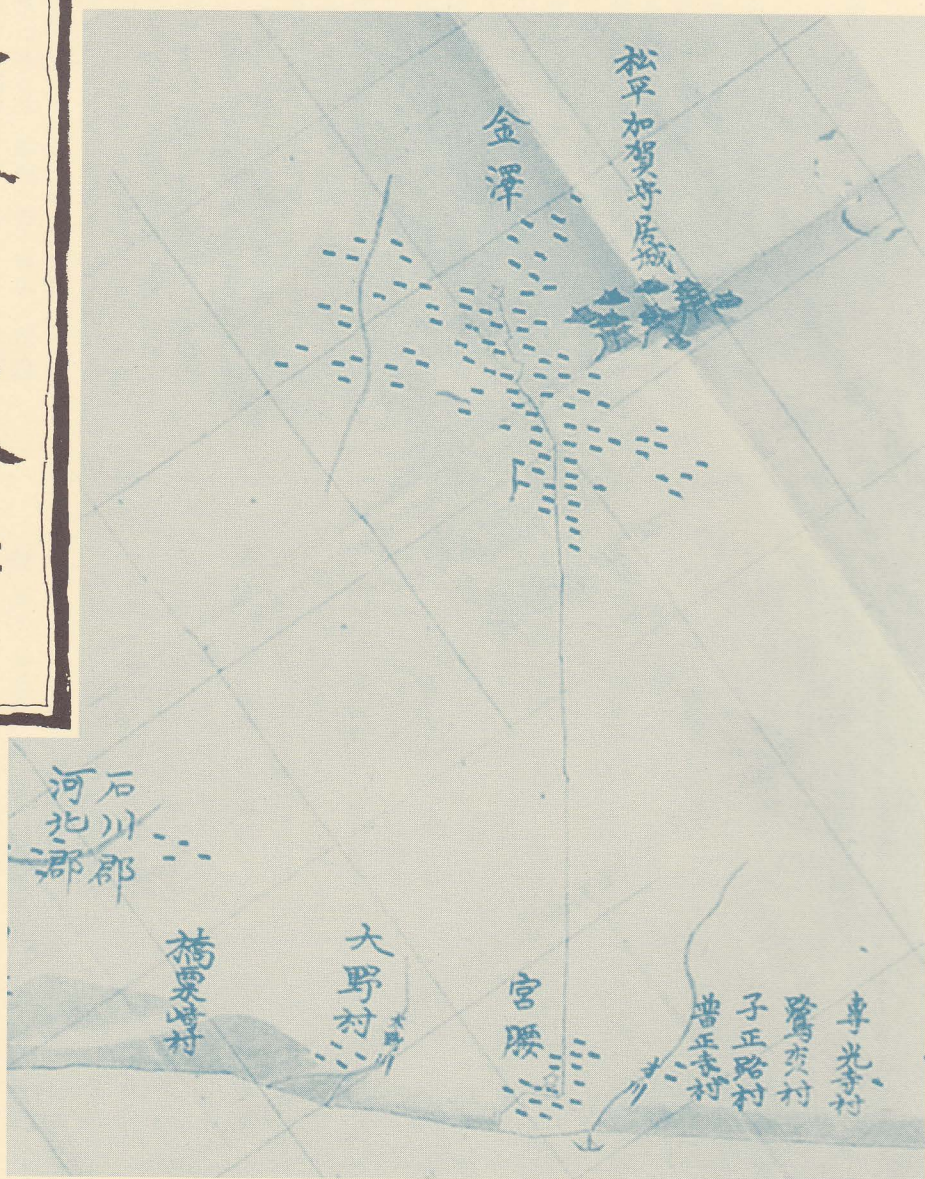


史料と伊能図

伊能忠敬

研究



二〇〇七年 第四九号

伊能忠敬研究会

表紙図解説 米國議會圖書館蔵

伊能大図 86号 金沢・宮腰(部分)

享和三(一八〇三)年二月に江戸を出立した第四次測量隊が、加賀藩入りしたのは六月二十四日のことである。支藩の大聖寺藩ではトラブルもなく順調だった。ところが、本藩の安宅村(勸進帳)の舞台)に入ると、出迎える十村手代は「領主の指図なし」と、村高・家数等を答ええない。加賀藩は「隠密がましき」と警戒心を抱いて、対応策を指示していたのだ。

表紙図の海岸は白砂青松。打木村・下安原村などは、今は砂地を利用した「加賀野菜」の主要産地となっている。地図上の錨マークは、犀川(図では才川)の河口に発達した加賀藩の外港宮腰(現在の金石)である。藩米や専売品の塩などの積み出し港として賑わっていた。金沢はこの犀川と浅野川を城の外堀とみなして建設された城下町である。

宮腰から金沢城下まで、ほぼ直線の測線が引かれている。今も「金石往還」と呼ばれる直線道路である。沿線には、寺中・観音堂・畝田・藤江・長田などの村々が存在する。しかし、伊能図にはこれらの村名は記載されていない。「測量日記」には、量程車を使ったとある。第四次測量では他にも、小田原・駿府・名古屋城下など、通常の作業をばばかつて量程車を使用した例はある。しかしここでは、忠敬一行が緊張と警戒心をもって行動せざるを得なかった証である。ただし、量程車のみで測ったわけではないだろう。得意の歩測を併用したに違いない。金沢城下での宿所は、尾張町「住吉屋」だった。明治期に近江町市場近くに移転したが、現在も「すみよし屋」の看板を掲げて旅館業を営んでいる。

それにしても残念なのは、加賀藩の警戒心のせいで、私が住んでいる「畝田」が、どの伊能図にも記載されることがなかったという事実である。

(表紙題字は伊能忠敬の筆跡)

河崎 倫代

目次 49号

特報 祝・叙勲、刊行祝賀 現代の快挙を祝す

二〇〇七年度総会報告

事務局長就任にあたって

新任ご挨拶

話題Ⅰ 銅像とご対面！神保新さん

「忠敬・重富展」が実現！今秋開催

佐渡へのいざない・佐渡旅行案内

映画「掘るまいか」を見ませんか

「06 伊能大図フロア展 in あさひかわ」

発刊「ウォーキングガイド茨城」

芳名録 白鳥庫吉 長岡輝海

話題Ⅱ 伊能家蔵書は五千冊 (一)

伊能大図総覧の地名と景観 (三)

「伊能大図謄写図」調査概報 (二)

ブックストリート・近著紹介

「佐世保戦国史の研究」について

旅のフォトスケッチ

青柳種信夫妻の墓誌

地域史料 今井八九郎の「室蘭図」(二)

研究ノート

忠敬先生関連の或る古書をめぐって (一)

「文化の開拓者 伊能忠敬翁」(六)

濱宅宮内家所蔵資料から (その三)

和算の人脈 (二)

伊能忠敬測量隊が観測した星 (二)

忠敬談話室だより

お便りから日々の話題 お知らせ

編集部

鈴木 純子

前田 幸子

伊能 陽子

伊能記念館

石川 進

山岸俊男さん

安川義巳さん

川上 清

伊能 陽子

佐久間達夫

星 埜 尚

鈴木 純子

平川 定美

野田 茂生

國重 正樹

井口 利夫

秋間 実

宮内 敏

宮内 敏

安藤由紀子

佐久間達夫

福田 弘行

編集余話

編集部

編 集 部

表紙図解説 河崎倫代

編集委員 前田幸子

祝 伊能洋 陽子ご夫妻

「紺綬褒章」受章

安藤由紀子さん

「世田谷伊能家伝存・

伊能忠敬関係文書目録」編纂

現代の快挙を祝す！

柳の芽史跡の軒の古りにけり

春愁や伝え来しもの手離して

昭和三十六年 伊能多嘉子



六月二十四日 富岡八幡宮にて

事務局長に鈴木純子さん 編集長には前田幸子さん

どうぞよろしく

六月二十四日、二〇〇七年度の伊能研究会総会が富岡八幡宮で開催され、梅雨時らしくしとしとと雨が降る天候でしたが、北海道や九州など遠方からも会員が駆けつけ、同好の士の集まりらしいなごやかな雰囲気の中、清水靖夫監事の司会により講演から総会が始まりました。会員総数二二三名。出席者五一名、委任状七六名で、総会は成立しました。



第一部 講演『伊能大図総覧』の刊行について

星塾代表は伊能大図にみえる珍しい地名について。本書の編纂作業のなかで三万九千にわたる地名を整理して地名索引を作成されました。その際「正月不知」という地名を見つけ、正しい読み方と地名の由来を新聞紙上などで呼びかけたところ、「正月不知」は「しょうがつしらず」と読み、「正月も迎えられないほど貧しい土地」ではなく「正月が来たのも気づかないほど温暖でんびりした風情の土地」という大変良い意味の地名であることが、会員の辻本さんからのお知らせで判明しました。

また岩手県一関市には「鬼死骸」という地名があり、これはその昔、

坂上田村麻呂が大武丸という鬼を征伐した伝説にもとづいており、はねられた首が飛んでいつて落ちたところが宮城県鬼首。胴体はこの地に残って鬼死骸という地名となったということでした。回覧されてきた伊能大図のコピーで「正月不知」や「鬼死骸」という小さな文字で書かれた地名を確認しながら、大変面白く伺いました。

次に渡辺名誉代表から『伊能大図総覧』出版の経緯、出版に至るまでの曲折、資金の問題、印刷の苦心、マスコミを巻き込んだの宣伝活動など、さまざまな工夫と苦労について報告がありました。

一組四〇万円の豪華本が僅か一ヶ月で売り切れとなったこと、購入者は意外にも六割が個人だったこと等々。結果として成功裏に終わることができた刊行事業について、安堵と喜びがにじみ出た報告でした。ついで、鈴木純子理事より伊能図の正本の焼失、副本の献納、献納本の動き、大図の模写について内務省系、陸軍参謀局、海軍水路部と三系統があること、ならびに明治期の伊能図利用についてのお話。伊能図への理解を深めるための貴重な講演でした。

第二部 総会

第一号議案 経過報告は星塾代表から前回平成16年12月12日に開催された創立10周年記念総会以降の経過について報告がありました。この間の事業としては、平成17年は佐原へ、平成18年に平戸、長崎へ研修旅行を実施。会報『伊能忠敬研究』は第39号から48号までの10号を発行。「伊能図展」の開催は、平成17年1月の籍張メッセから平成19年3月の高知市まで、主なものだけでも八つを数えました。また、平成18年2月に伊能家から「伊能忠敬記念館」に忠敬関係史料九一八点を寄贈し、安藤、伊能、渡辺氏に市長から感謝状を受けたこと。また同年6月には安藤由紀子、伊能陽子両氏が二十年が

かりで作成した『世田谷伊能家伝存伊能忠敬関係文書目録』を発行、全国三百余の図書館や博物館に寄贈されました。史料、目録の寄贈に対し、今年2月、国から伊能ご夫妻に紺綬褒章が授与されました。さらに『伊能大図総覧』出版や、一橋大学と海上保安庁における伊能図の調査などこの間の多彩な活動について報告がありました。

第二号議案 二〇〇六年度収支報告と二〇〇七年度予算案

福田事務局長より会費収入に見合う会計の現況、現在の事務局が日本地図センターに存在の意義とその内容、前号に挟み込み配布した決算書、予算案と報告事項の議案説明がありました。

第三号議案 役員の選任

以下星埜代表から。二〇〇一年から編集長を兼務されてきた福田事務局長が退任され、鈴木純子理事が事務局長に、編集長には前田幸子新理事が提案されました。

参考報告は研究会の特定非営利法人化に向けて、検討を始めていく。設立申請は佐原の地に活動拠点をとのお話がありました。以上の議案は原案通り拍手をもって承認されました。

第三部 受章祝賀会

議事は滞りなく終了し、記念写真撮影をおこなったあと、伊能ご夫妻の受章を祝い、安藤由紀子氏には目録完成をお喜びする。花束贈呈から長年にわたる史料編纂の労をねぎらいました。

第四部 懇親会

贈呈式のあとは懇親会に移行。金窪氏の首頭で乾杯するや、談笑のざわめきが会場に満ちました。全国各地から上京された会員の方々から各支部での活動の様子を伺い、また昨年の研修旅行の思い出など語

り合って、楽しいひとときを過ごしました。

宴の締めはおなじみ注連縄研究の太友正道顧問。豪快な三三七拍子で見事に締め、総会はお開きとなりました。

まだ余韻が残る会場を後にして、伊能洋画伯の絵葉書集、奥能登の塩田で作った揚げ浜塩、『地図中心』には木谷、星埜、芳賀、鈴木さん方の頁に「日本のウォーキング名所500選」、そして佐渡ガイド。いろいろお土産が入った袋を下げて帰途につきました。この十二年間で築きあげてきたものの大きさと手ごたえをあらためて感じた総会でした。

(前田幸子・福田弘行)

ようこそ総会に

敬称略

秋間 実	浅井 京子	安藤由紀子	石川 清一
井上 靖子	伊能 隆男	伊能 洋	伊能 陽子
今村 恵二	植田 浩一	江口 俊子	大内惣之丞
大友 正道	大沼 晃	荻原 哲夫	海保 英之
柏木 隆雄	金窪 敏知	川上 清	河崎 倫代
河島 悦子	喜多 昭一	木谷 道宣	窪谷悌二郎
齋藤 仁	坂本 義親	座間 喜美	島崎 恭一
清水 靖夫	白根 貞夫	新沢 義博	神保 弘之
鈴木 純子	中川 幸子	永野 達代	成家 淑子
丹羽 菊乃	橋本 新治	馬場 良平	平岡 佳子
福田 弘行	藤岡 健夫	星埜 由尚	堀江 敏夫
前田 幸子	宮内 敏	八木 勲	山岸 俊男
山本 公之	渡辺 一郎	渡辺 孝雄	51名

ゲスト参加 日本ウォーキング協会

ありがとうございました！

岡野吉春会長 藤本伸一さん 伊藤浩史さん

とて、簡単に自己紹介をさせていただきます。私は戦前生まれ、長く国立国会図書館に勤務（主に地図室）し、定年退職後、大学の非常勤講師などもつとめました。それも昨年定年となりました。伊能図に限らず、地図、地図史全般に関心があり、日本国際地図学会、その他地図史関連の諸活動にかかわっております。伊能忠敬研究会には設立当時から参加していますが、理事として会の運営に加わるようになったのは比較的近年のことです。

国立国会図書館在職中に気象庁に残っていた最終上呈伊能大図の明治期模写本43面を確認し、国立国会図書館への寄贈をいただいたこと、渡辺一郎さんのアメリカ議会図書館大図の発見を受けて、その後の現地調査に参加したこと、それらを用いた展示会、図録編集などなど、主に「伊能図」を中心にする活動に参画してきました。昨年刊行された話題を呼んだ『伊能大図総覧』（河出書房新社）では、解説の一部、図版のチェックなどにかかわらせていただきました。研究テーマとしては、当面、江戸期、明治期の伊能図の利用の跡を確認したいと考えています。「伊能図」を調べるほどに、日記、書簡、関係文書などの重要性を痛感させられているところです。

総会時点での会員総数は213名、総会で提起されたNPO法人化の検討という大きな課題も抱えています。事務局の激務をこなすにはいささか馬齢を重ねすぎていることはご覧のとおりで、きめ細かい活動はままならないと思いますが、皆様の「ご尽力を何よりのたより」として、星塾代表理事をはじめとする役員諸氏と力を合わせ、渡辺名誉代表とも相談しながら、これまでの諸先輩の蓄積を生かし、わずかでも積み足せるものがあればと考えています。会全体の動向も十分把握しているとはいえず、至らぬ点が多いかと存じます。ご注文、ご叱正をお寄せください。

会誌は居住地の隔たりなく、会員間の交流ができる貴重なメディアであり、特に、当会誌は「伊能」に収斂しながらの、個性あふれる多様な切り口が魅力です。原稿、ニュースなど、どしどしお送り下さいますよう、お待ちしております。

最後になりますが、これまで長期にわたる、福田弘行さんの事務局および編集担当のご苦勞に厚く感謝申しあげます。あらためまして、どうぞよろしくお願いいたします。

新任ご挨拶

前田 幸子

このたび福田編集長のあとをうけて会報「伊能忠敬研究」の編集、発行を担当することになりました。若輩者であり非才の身に編集長の大任はことのほか重く感じられますが、会員の皆様方のご支援をいただいて、責を果たしてゆきたいと存じます。

福田編集長は二〇〇一年の第二七号から六年間、通算二三号にわたる会報の編集、発行を担当してこられました。毎号六四頁以上、年四回の会報発行を、事務局長を兼任しながら担当してこられたことは、まったく超人的というほかありません。ご奮闘に敬意と感謝を表します。

偉大な福田編集長の業績をうけつぎ、みなさまのお力添えを得まして、非力ながら精一杯つとめていきたいと思っております。どうぞご協力とご指導を下さいますようお願いいたします。



江口俊子さん・画



わしがモデル！ 銅像とご対面！

神保新さん（忠敬の父神保貞恒の子孫）が五月三日、初めて富岡八幡宮の忠敬銅像を訪ねました。

銅像制作者・酒井道久氏と共に、参考資料のため横芝のお宅で写真を撮らせて頂いたのは五年前のことになります。

新さんは大満足で、まわりの見物客に、「私がモデルです」と話されたとか。

さぞ皆さん、驚かれたでしょう。

写真・神保新さん（左）とお孫さん

（伊能 陽子）

『忠敬・重富展』が実現！

今秋、伊能忠敬記念館にて

特別展開催「西日本測量と絵地図」 嘉数次人氏が講演

一八〇五年、東半部日本沿海図完成後、幕臣に取り立てられた忠敬は、西日本への測量に出かけます。しかし、その前に忠敬の師高橋至時の命を受け西日本を測量し、地図をつくった人物がいます。それが、間重富です。重富は、江戸で至時にかわって暦学を教えていた人物で、忠敬が使用した測量器具の製作にも関わっていました。

今回の特別展では、この間重富の業績と忠敬との関わりについて紹介し、あわせて重富、忠敬が測量する以前の日本地図も紹介します。

期 間 平成19年10月2日（火）～11月25日（日）

休館日 10月9日15日22日29日 11月5日12日19日

展示資料

間重富関係資料（大阪歴史博物館所蔵）

日本地図（含重要文化財 古河歴史博物館蔵 金沢文庫所蔵）

講演会「間重富と伊能忠敬」

講師 大阪市立科学館主任学芸員 嘉数次人さん

期日 10月20日（土）午後2時～4時

会場 香取市佐原中央公民館 「聴講は先着順の予定」

ギャラリートーク（展示解説）

講師 大阪市立科学館主任学芸員 嘉数次人さん

期日 10月21日（日）午前10時

照会先 ☎0478・54・1118 伊能忠敬記念館

佐渡へのいざない

石川 進



皆様は「佐渡」と聞くと何を思い浮かべますか? 「金山、流人の島…」などでしょうか。実は江戸時代の佐渡は「地図の発信地」の一つでもあるのです。「佐渡旅行」を機会に、少しそのあたりのことをご紹介いたします。

佐渡は古くから開発が進み文化水準の高い地域でした。倭名類聚抄には佐渡国として郷数二二、抄田積三、九六四町歩が記録されています。全面積に占める抄田及び郷数の割合は、およそ大和と同じ割合で、越後や越中の開発程度と比べるとはるかに進んでいました。稲作文化が高い水準で定着していたようです。加えて、承久の変の順徳上皇や世阿弥など政争に敗れた人々が佐渡に流されてきて、中央の文化を直接佐渡に伝えたのでした。

また、日本海の海上交通の影響も大きいと思われます。貞応二年(一二二二)の廻船式目では、主要港の「七湊」は全て日本海側にありました。佐渡は日本海交易の中継点として要衝の地でした。

佐渡島の西南端に宿根木の集落があります。この村は和船の産地として栄え、また大阪へ城米を積み出す廻船業で富を築いた村です。伊

能忠敬がこの地を測量したのは享和三年(一八〇三)のことでした。

それから17年後の文政三年(一八二〇)、この宿根木の地に柴田収蔵が誕生しています。収蔵は16歳で島内の地方絵図師石井夏海・文海親子から地図製作法を学び、23歳にして師の指導のもとに伊能図の重訂作業に従事したのでした。そして大成し江戸に出て、安政四年(一八五七)洋学所の絵図調出役に登用されるのでした。

柴田収蔵の最大の功績は嘉永五年(一八五二)に「新訂坤輿略全図」を上梓したことでした。それよりおよそ二百年前に、すでに「万国全図」(神戸市立博物館所蔵)は鎖国日本にもたらされていました。それは南の大きな「メガラニカ」(大陸)の存在が大きな特徴になっており、現代の目からはかなり違和感を感じるものでした。

時あたかも翌年にはロシア使節プチャーチンが極東艦隊を率いて長崎に来航するなど、幕末動乱の幕開けの時期でした。柴田収蔵の世界地図がこの時期に上梓されたその意義はすこぶる大きなものであったのです。

佐渡は伊能忠敬の地図作成を咀嚼し、そのうえに柴田収蔵の世界地図上梓を支えた、豊かで高いレベルの文化と世界を見る目が培われていたということを知ってほしいものです。佐渡が世界地図の発信地であることを知って欲しいと思うのです。

佐渡は新鮮な魚と新潟の地酒で皆様の御来港を心よりお待ちしております。

【佐渡旅行のメニュー】 10月14日(日)～15日(月)

・江戸幕府の財政を支えた佐渡金山見学

・伊能図を参照に内陸部を測量し改定した石井夏海の「佐渡図」見学

・柴田収蔵の生地・宿根木訪問。柴田収蔵について講話

・佐渡歴史伝説館見学

・妙宣寺五重塔、清水寺(せいすいじ)見学(京都清水寺のミニ版)

・伊能忠敬が天体観測した場所にご案内

・佐渡で最も風光明媚な尖閣湾の眺望(映画「君の名は」で有名)

※16日(火)オブショナルツアーは「良寛めぐり」で出雲崎・寺泊方面を探索いたします。地元良寛会会員による案内を予定しています。
どうぞ、こぞつてご参加下さい。(いしかわ すすむ・新潟支部)

14日 東京駅(上越新幹線)ー新潟(ジェットfoil)ー両津港
ー相川高校・佐渡金山 ホテルひらね泊

15日 尖閣湾ー宿根木・佐渡歴史伝説館・妙宣寺・清水寺・トキの森公園ー両津港ー新潟港(解散) 新潟泊

16日 良寛めぐり
長岡駅(上越新幹線)ー東京駅

○費用予定 東京発 六万二千元 新潟集合 四万二千元

良寛めぐりは三万円プラス。

○申込・資料請求 柏木幹事 電話03・3294・7383 柏木事務所

締切 8月30日 (今回は正式申込になります)

○事務局より 新潟県中越沖地震にお見舞い申し上げます。

新潟支部の熱意に感謝です。初めての佐渡を愉しみに。
白秋の「砂山」はいい童謡です。 柏木隆雄さん

佐和田に残された天体観測書

02年4月23日 新潟日報

会報29号既報



佐渡が生んだ地理学者
柴田収蔵の墓

宿根木・称光寺は千石船が帰りがけに荷とした御影石で作ったという念仏橋を渡った集落の最奥にある。収蔵の墓は、信心深い宿根木の人々の献花が絶えることなく、古色蒼然の中にも明るさのある本堂裏手墓地、ほぼ中央にある。
(写真提供・山浦佐智代さん)



柴田収蔵資料から



映画「掘るまいか」を見ませんか！

忠敬さんに並ぶ、16年も穴掘り続ける我慢と努力

「これは単なる美談ではない。日本の地域共同体には、助け助けられる共同作業の伝統が確固としてあったことの証明である。この忘れかけようとしている山村のかつての大事業を、橋本信一監督をはじめとするスタッフは見事に映画に魅えらせてくれた。

かつて苦楽を共にした人々の、その豊かな表情を通じて、村が生き

きと伝わってくるし、村民による工事の再現場面は誇り高く気迫にあふれている。

素晴らしい映画である。ぜひ広く多くの人々に見てほしい」

映画評論家

佐藤忠男氏

上映パンフレットから

豪雪の山村・新潟県山古志村
つるはし一つでトンネル掘りに立ち向かった村人たちの
16年におよぶ精神とエネルギーの記録



山岸俊男さんはこの作品に企画、制作、出演されました。上映企画を募集しています。会場は公共施設で各種イベントと併催も可。若い皆さんに推奨。ご関心の節は☎042・424・4568 福田まで。(F)

「06伊能大図フロア展 in あさひかわ報告」から

安川義巳さん提供

昨年九月の開催は

五日間、四万二千人が来場しました。伊

能忠敬、松浦武四郎など大先輩の偉業が

公開され、多くの関係者の熱意、努力の

跡を記憶と記録に残す記念誌が完成しました。

たくさんの子供たちが会場を訪れ、本物の伊能図を見て歩測を体験し、最新の測量機器にも触れました。多くの笑顔を見受けました。

高木崇世氏所蔵「江戸時代の蝦夷地図」の公開

江戸時代の蝦夷地図 (高木崇世氏 所蔵)



講師は古地図研究家高木崇世氏
ユーモアたっぷりの講演に聴衆も引き込まれる



芳名録より

―佐原伊能家を訪れた人々―

伊能 陽子

學界之偉人
史界之巨匠

白鳥庫吉

白鳥 庫吉

しらとり くらきち (一八六五―一九四二)

東洋史学者。下総茂原生まれ。東大教授。

近代的東洋史学を確立し、北方民族および西域諸国の研究を開拓。東洋文庫研究部を創設。

著「西域史研究」など。

(広辞苑)

※年月がありませんが昭和九年頃と思われます。

大八洲免く里

津久志亭

後の世濃

美ち能枝折登

なりし君可な

長岡輝海

大八洲 免く里

津久志亭

後の世濃

美ち能 枝折登

なりし君可な

長岡輝海

おおやしまめぐり

つくして

のちのよの

みちのしおりと

なりしきみかな

※長岡輝海さんは不明です。

年月もわかりませんが、

多分、昭和四、五年です。

おこころ当りがありましたらご一報を
お待ちしております。

伊能家蔵書は五千冊（一）

佐久間 達夫

伊能家の文庫土蔵は中国と日本の書籍のやま

伊能忠敬が、寛政七年（一七九五）に江戸の深川黒江町に出る以前に、どのような学問をしたか。長男の景敬が作成したものといわれている「書籍目録」（伊能忠敬記念館所蔵）を基にして記してみよう。

一、忠敬の出府前の学問

忠敬の前半生における学問の種類とその程度については、次のようにいわれている。

忠敬の父の出生の家から分家した屋号五右衛門の当主であった神保光一氏（昭和六三年 九〇歳）は、

「三治郎（忠敬の幼名）は、中村（現千葉県多古町）の平山元徳という人物に漢学を学んだが、数か月で習得したため、元徳の紹介により、常陸国の『アソン』という学者のもとで学んだ。しかし、ここでも一年程で習得してしまった」という話が伝えられている。

また、後に忠敬の天文暦学の師となる高橋至時の二男で、第五次測量に参加した渋川景佑（一七八七—一八五六）が文政四年に編述した「東河伊能翁伝」は、

然れども僻陋に居りて、その師に乏し。因りて常州土浦の医某に就いて経伝、及び医籍の句読を受く（以下略）と記す。

さらには、忠敬が後に婿養子となる伊能家とともに下総香取郡佐原村（現千葉県香取市佐原）で豪商であった永沢治郎右衛門家の分家半

右衛門が、明治一〇年頃に語った話として、

三治郎は、一三歳のとき、常陸国の某寺の住職について

数学を学んだ。

という話も残されている。

忠敬が、伊能家に入り婿したとき、伊能家の後见人であった伊能豊秋は、明和二年（一七六五）十月二一日付の日記に

医者（伊能家）の儀は、得と御相談然るべし。一体、御身分弱き生まれにて気ばかり強く、少々医学成され候故、万事人の申す事、取り用いこれなく（以下略）

と、記している。忠敬が医学を学んでいたということだけでなく、その性格の一端をも窺えよう。

以上、神保光一氏の話や永沢半右衛門の話、「東河伊能翁伝」「伊能豊秋日記」の記述には、若干の相違はあるものの、ほぼ一致している。

伊能忠敬の少青年期の学問の内容について述べたが、親の膝下にあった時の学問は、主に経学、すなわち四書五経で、数学と医学も教養程度に学んだことがわかる。

また、佐原時代に記した「奥州紀行」「関西旅行記」（伊能忠敬記念館蔵）や、全国測量の時に書き綴った「測量日記」（伊能忠敬記念館蔵）に、数多くの古歌や歴史的事項が書き留められていることから、忠敬は、文学的、歴史的な面に興味関心があり、それを生涯持ち続けたことが窺われる。

二、「書籍目録」の内容

伊能家が所蔵していた「書籍目録」は、津宮行分、第二、玄、黄、宇、宙、洪、荒、日、月、盈、是、辰、宿、列、張、寒、来、暑、往の二十項目に分け、四百二部、三千四百二十一冊が記述されている。

資料一 書籍目録

伊能忠敬記念館所蔵

● 津宮行の分

- | | | |
|-------------|-------------|----------|
| □詩経草木疏図解 | □楊子法言 | □賈誼新書 |
| □匡謬正俗 | □韓非子 | □京大和名所図会 |
| □瑯琊代酌編 | □文海披沙 | □釈親考 |
| □陸賈新語 | □王充論衡 | □墨子 |
| □大明一統志 | □佩文韻府 (箱とも) | |
| □鶴林玉露 (箱とも) | □西陽雜俎 | |
| □東鑑 (箱とも) | □通鑑綱目 (箱とも) | |

● 第二

- | | | | |
|-------|---------------------|--------------|-----|
| 左伝 | 十五冊 | 異称日本伝 (子年不見) | 十五冊 |
| 孫子国字解 | 十一冊 | 王註楚辞 | 六冊 |
| 三音正伝 | 二冊 | 南留別志 | 五冊 |
| 明七子詩解 | 三冊 (自十八まで音釈一冊、計十九冊) | | |

● 玄第三

- | | | | |
|-------------|----|-------------|----|
| 論語集解 | 二冊 | 論語皇侃義疏 | 十冊 |
| 論語筆解 | 一冊 | 論語古訓 | 五冊 |
| 論語外伝 | 十冊 | 論語釋解 | 五冊 |
| 論語国字解 | 五冊 | 古文孝経 | 一冊 |
| 古文標註 (子年改無) | 一冊 | 古文指解補註 | 一冊 |
| 古文述 (酉年改無) | 一冊 | 古文古註 (酉年改無) | 一冊 |
| 古文国字解 | 一冊 | 詩経毛伝補義 | 十冊 |
| □詩経草木疏図解 | 五冊 | 詩経名物并解 | 四冊 |
| 詩経国字解 | 十冊 | 尚書大伝 | 五冊 |
| 尚書国字解 | 五冊 | 趙註孟子 | 四冊 |

左伝林堯叟註

二五冊

左伝属事

二二冊

左伝弁誤

四冊

左伝系譜

一冊

左伝音註

一冊

公羊伝穀梁伝

十四冊

春秋胡氏伝 (唐本)

五冊

詩書古伝

十五冊

尔雅註疏

五冊

増註大学

一冊

大学解 一と中庸解

上下三冊

祖徠学則

一冊

祖徠答問書

三冊

六経略説

一冊

聖学問答

二冊

弁道書

一冊

弁道 全と弁名

上下三冊

大疑録

二冊

□釈親考

二冊

親族正名

一冊

和読要領

三冊

斥非

二冊

論語微解

二冊

唐詩訓読

五冊

王註老子国字弁

四冊

● 黄第四

- | | | | |
|-----------------|-----|---------|----------|
| 荀子全書 | 十冊 | 読荀子 | 四冊 (久保木) |
| □楊子法言 | 六冊 | 晏子春秋 | 五冊 |
| 塩鉄論 | 十二冊 | 文中子 | 二冊 |
| 韓詩外伝 | 五冊 | □陸賈新語 | 一冊 |
| □賈誼新書 | 五冊 | 劉向説苑 | 四冊 |
| 劉向新序 | 五冊 | 孔叢子 | 三冊 |
| 白虎通 上下と風俗通 上下四冊 | | 鸞子 (写本) | 一冊 |
| 国語 (酉年改蕪) | 五冊 | 列女伝 | 十一冊 |
| 顔氏家訓 | 一冊 | | |
| 帝範 上下と臣軌 上下四冊 | | 西京雜記 | 二冊 |
| 列仙伝 | 四冊 | 述異記 | 一冊 |
| 王子年拾遺記 | 五冊 | | |

□王充論衡 英雄記(写本) 独断	八冊	古今註	一冊
	一冊	搜神記	八冊
□匡謬正俗 国史経籍志 世説新語補 輔儲篇 経済録	二冊	博物志	四冊
	四冊	斎丘子(写本)	一冊
素書国字解 忠義水滸伝 山海経	四冊	関尹子	一冊
	十冊	世説鑄	二冊
●宇第五 王注老子 老子国字解 郭注莊子 管子全書 劉子全書 呂子春秋(酉年改無) 商子全書 抱朴子 穆天子伝 吳越春秋 十八史略 歴代官制沿革図 竹書紀年	二冊	政談(写本)	四冊
	四冊	孫子国字解	十一冊
●宇第六 通鑑綱目	六冊	鈴録(写本)	八冊
	十冊	小説粹言	二冊
百六冊	五冊	論語微集覽	二十冊
	七冊	老子林註	二冊
全と漢武内伝・飛燕外伝	二冊	張注列子	二冊
	六冊	□墨子全書	六冊
全二冊	十三冊	□韓非子全書	十冊
	五冊	文子	三冊
戰国策	二冊	於陵子	一冊
	二冊	子華子	二冊
元明史略	二冊	大明一統志	六十冊
	二冊	蒙書評林	五十冊

●洪第七

後漢書

六十一冊

晉書

五十三冊

三国志

四十冊

□京名所図会

六冊

□大和名所図会

七冊

東海道名所図会

六冊

●荒第八

本草綱目

四十五冊

救荒本草

八冊

備急本草(写本)

十六冊

大和本草

十冊

広大和本草

十二冊

十四経和語抄

七冊

儒門事親

五冊

原病式

一冊

丹溪心法(唐本)

四冊

丹溪纂要

六冊

難經本義

二冊

仲景全書

七冊

内経 素問十二冊と靈樞六冊

十八冊

医断

一冊

建珠録 全

二冊

医方口訣

三冊

医事或問

二冊

奇効医術

二冊

素問評(写本)

一冊

藥微(写本)

一冊

活幼心法

一冊

易簡方

一冊

医療手引草 前後二編

四冊(子年改無)

用藥須知 前後二篇七冊

二冊

医方古言(写本)

一冊

医方大成論

二冊

九散諸方(写本)

四冊

古語拾遺

一冊

農業全書 十一冊(一冊不足)

二冊

中臣祓禊義解

三冊

●日第九

日本紀道証

二三冊

本朝系譜

十四冊

中臣祓禊櫛

一冊

和名鈔

十冊

和名鈔

八十一冊

本朝通記 前十一冊と後十四冊

二五冊

本朝通記 前十一冊と後十四冊

二五冊

五事略(久藤紛失)

一冊

三王外紀

一冊

五事略(久藤紛失)

一冊

和漢帝王年表	三冊	前王広陵記	二冊	古今原始	一冊	下學集	一冊
●月第十				日本釈名	三冊	三正俗解	一冊
事文類聚(前集二十一)	後集二十	續集十三	別集十四	四書白文	三冊	大系図	十四冊
淮南鴻烈解	六冊	孟子解	七冊	●宿第十四			
新刊用子格	四冊	明詩選	六冊	文選六臣註	六一冊	文選李善註(唐本)	二帙二十冊
毛詩鄭箋	五冊	尚書	六冊	楚辭王註	六冊	文語解	五冊
論語集解	二冊	古文孝經	一冊	○瑯琊代醉編	二三冊	○鶴林玉露	九冊
●盈第十一				○酉陽雜俎	十冊	五雜俎	十六冊
淵鑑類函	三十帙(二百冊)			輟耕錄	八冊	千百年眼	十冊
●是第十二				○文海披沙	八冊	事物紀原	十一冊
○佩文韻府	二百冊			○楊子方言	一冊	天學名目鈔	一冊
文體明弁	八四冊	文章軌範(酉年改無)	四冊	唐詩品彙	一冊	東藻會彙纂略	一冊
●辰第十三				竹山絶句標題	一冊		
四家集	八冊	文章緣起	二冊	●列第十五			
文則	一冊	古文矩(酉年改無)	一冊	五車韻瑞	二五冊	正字通(唐本)	四十冊
文林良材	四冊	古文後集	二冊	小補韻會	三一冊	字彙頭書(子年改無)	十五冊
卓氏藻林	八冊	芸苑卮言	四冊	字彙頭書莊岳音	四冊	統字彙補	五冊
詩藪	三冊	属文換字	一冊	釈名	三冊	広雅	三冊
名物六帖	六冊	五冊		百体千字文(十字文集法とも)	二冊		
広沢千字文	真一冊	広沢千字文	敬齋箴	韻鏡易解	五冊	磨光韻鏡	二冊
鳥石山人伝	一冊	文微明千字文	一冊	磨光韻鏡後篇	二冊	九弄弁	一冊
文微明千字文	膝王閣	歐陽詢九成宮	一冊	九弄和解	二冊	四声国字通	五冊
猿橋碑銘	一冊	鳥石唐詩選	二冊	助語辞	二冊	万象千字文	一冊
書法群華	一冊	字考正誤	一冊	草書韻會	一冊	和漢字名録	四冊
切韻指掌	一冊	韻鏡切要鈔(写本)	一冊	訓譯示蒙	二冊	助字譯通	三冊
譯文筌蹄(写本)	五冊	助字考	二冊	唐話纂要	六冊	和字正鑑鈔	五冊
				印判秘訣	一冊	譯文筌蹄	六冊

● 張第十六

吉詩紀

三三冊

唐詩紀 三三冊(唐本) 六十五冊 今昔物語(破本)

二十冊

● 寒第十七

唐詩選

一冊

唐詩訓解

四冊

唐詩掌故

四冊

唐詩句解

九冊

唐詩諺解

三冊

說唐詩(唐本)

一帙(四冊)

七才子詩集注解

二冊

七才子詩集解

三冊

絕句解

一冊

絕句考証

三冊

絕句解拾遺

一冊

絕句解拾遺考証

三冊

唐詩品彙七律

五冊

唐詩品彙七律絕句

四冊

唐詩正聲

二冊

三家詩話

一冊

滄溟尺牘

一冊

滄溟尺牘解

一冊

滄溟尺牘諺解

三冊

弄州尺牘

一冊

弄州尺牘解

一冊

弄州尺牘記要

一冊

明七子尺牘

二冊

徂徠文集

十六冊

南部文集

二四冊

荑荷園稿

五冊

江陵集

四冊

金華文集

四冊

草蘆詩集

六冊

生駒詩集

五冊

嚶鳴館詩集

三冊

周南文集

六冊

大湫詩集

三冊

松浦詩集

三冊

蛻巖詩集

四冊

白石余稿

三冊

南海詩集

一冊

玉山詩集

二冊

日本詩選

七冊

日本詩史

三冊

蘭亭詩集

六冊

諷園名公四序

一冊

新刻蒙求

三冊

新刻蒙求国字解

五冊

蒙求拾遺

三冊

大東世語

五冊

唐詩詠物詩選

一冊

詩題苑

三冊

詩則

一冊

詩學解環

一冊

書東式

一冊

三音正譌

二冊

諷園隨筆

三冊

地名箋

一冊

詩家法語

一冊

明詩擢材

一冊

唐明詩聯

一冊

詩門一覽

一冊

草書要決

三冊

詩箋

一冊

產論翼

二冊

天地弁

三冊

● 來第十八

大日本史(写本)

百五十冊

● 暑第十九

編年集成(写本)

五十冊

集義和書

六冊

武家盛衰記(写本)

三六冊

九畹齋記

一帖

人物伝一帖

蘭亭記一帖

● 往第二十

史記

二五冊

老子特解

二冊

南郭絕句(酉年改無)

一冊

詩題苑(写本)

六冊

唐詩聯材

一冊

南留別志

五冊

閑散余錄

二冊

度量衡考

二冊

初學作文法

二冊

譯文箋蹄字引

一冊

明詩礎

一冊

唐詩礎

一冊

尺牘活套

一冊

○天文図解

五冊

省文集(写本)

一冊

産論

二冊

日本輿地図

一帖

左伝一冊

文撰六一冊

武德安民記(写本)

三十冊

集義外書

八冊

累代武鑑(写本)

十五冊

唐賢詩帖

一帖

午門朝見帖

一帖

老莊翼注

十七冊

老子解

一冊

老子妄言	二冊	大學考証	一冊
四始考証	二冊	好古日録	二冊
○大成算經(写本)	二十冊	八線互求法(写本)	一冊
○算法天元録	三冊	算法顯術	一冊
○算法古今通覽	五冊	○算法天元録	一冊
○算法算組	五冊	○算法廓如	一冊
○算法得幸録	二冊	○算法統宗	五冊
○開成算法	四冊	○拾璣算法	五冊
○点竈算法	二冊	○算學啓蒙	七冊
演段診解	四冊	○量地指南後編(写本)	五冊
○規矩分等集	二冊	天経或問	四冊
天経或問序図解	三冊	天学指要	四冊
○天文図解	五冊	地球一覽図	一帖
○授時曆診解	六冊	授時曆俗解	一冊
○授時曆図解發揮	三冊	○貞享曆(写本)	二冊
○宝曆甲戌曆(写本)	六冊	○皇和通曆	三冊
○皇倭通曆蝕考	三冊	○古曆便覧	一冊
○日東通曆	二冊	○蝕算法	一冊
○曆学法数原	五冊	烈祖成蹟(写本)	十六冊
紫輿紀略(写本)	一冊	○算法指掌大成	五冊
○和漢算法大成(子年改)	七冊	求四正相矩累計度	二冊

◎古目録に有之候へども、當時書櫃中に無之分。但し、先年より如此。

開口新語	二冊	和字大観鈔	二冊
○量地指南	三冊	前漢書(酉年改)	五十冊
増註家語	五冊	箋注蒙求	三冊
四声便蒙	一冊	頸注古今和歌集抄	六冊

毛詩	五冊
書經音義	一冊
合類大節用集	十三冊

尚書	六冊
譯文筌蹄	六冊

旧蔵目録

●東

四書大全	二二冊
------	-----

●壁

古文前集	三冊
古文後集診解	二十冊
・三体詩	四冊
・尺牘青錢	三冊
・四家絶句(亥年改無)	四冊
・三重韻(酉年改無)	一冊

古文後集合解	十冊
・杜律	三冊
・本朝四家絶句	四冊
・聯珠詩格(酉年改無)	二冊
・詩学小成(子年改無)	四冊
・和語韻略(子年改無)	一冊

詩料	一冊
医学灸要詳解	四冊
大成論	一冊
医学指南	一冊
合類衆方規矩	九冊
本草原始	四冊
朗詠集	二冊
医学源流	一冊
詩筌	二冊
泉志	三冊
職原抄参考	二冊
・觀音冥応録	十冊
詩文重宝記(酉年改無)	一冊

・針灸大成	七冊
・三藏弁解	六冊
・大成論頭書(子年改無)	二冊
・本草弁疑	五冊
・外科指南	四冊
・農業全書	十一冊
・明元算法	二冊
・童蒙七書	一冊
・唐詩選掌故	二冊
・伊品波韻(子年改無)	一冊
・和漢合運年代記	四冊
・詩聯大成	二冊

● 図	五経羅山点	十一冊	易学啓蒙図説	一冊	● 本朝三國志	三十六冊	● 西國盛衰記	十八冊
	四書(孟子ばかり有る。外不足)	十冊			● 四海太平記	十八冊	● 後太平記	二十一冊
	四書頭書	十冊	● 近思録(大学中庸不足)	四冊	● 西國太平記	十冊	● 北条五代記	十冊
	近思録詳説	二六冊	大極図説	一冊	武將感狀記	十冊	三楠実録	二十冊
	小学(丑三月二五日亀嶋為登)	四冊			● 桜井書(酉年改無)	一冊	桑々発句集	二冊
	● 楽訓	三冊	● 孝経便蒙詳説	五冊	● 阿羅野	三冊	繪具皿	二冊
	● 日本書紀	十五冊	● 仮名神代	四冊	誰力家	二冊	猿蓑	二冊
	陽復記	二冊	● 王代一覽	七冊	一塵重山集	二冊	桐ノ一葉	一冊
	● 沙石集	十冊	風俗文選	九冊	勾兄弟	三冊	幽蘭集	一冊
	● 行脚文集	七冊	● 方丈記	二冊	江戸筏	一冊	百千万	三冊
	夢中一休	四冊	田舎一休	四冊	吾孀布里	六冊	誹諧節用集	八冊
	● 田舎莊子	五冊	当世穴鑿	五冊	誹諧古今明顕	一冊	子ムリサマシ	一冊
	偏鉄挺論	五冊	鎌倉志	十二冊	寛永行幸記	二冊	当用書札集	一冊
	堪忍記	四冊	● 永代蔵	六冊	東紀行	一冊	誹諧鰐	九冊
	千歳記	七冊	● 神仏感応編	八冊	続滝ノ声	二冊	亥歳旦	二冊
	孔方図鑑	一冊	和漢名数(子年改無)	一冊	枝葉集	一冊	江左風流	一冊
	華夷通商考	一冊			名君恩光録	五冊	金魚育草	一冊
● 書					公家大名文通	一冊		
● 東鑑	二五冊				● 翰			
● 府	二十冊	● 太閤記	二二冊		通俗漢楚軍談	十八冊	通俗両漢紀事	三十冊
● 甲陽軍鑑	二十冊				通俗三國志(近年不見)	五十冊	通俗続三國志	三七冊
● 西	六冊				三河後風土記	五十冊	今昔物語	三十冊
● 保元平治	六冊	● 源平盛衰記	二五冊		● 墨			
● 園	二二冊				武野燭談	三一冊	● 三遠日記	四冊
● 武田三代記	二二冊	● 東國太平記	十八冊		大秘録	十三冊	● 関ヶ原軍記大全	三三冊
新編東國太平記	十冊	● 北國太平記	十二冊		琉球来聘記	三冊	朝鮮来聘記	五冊
					朝鮮来聘記	一冊	四戰記	四冊

難破戦記 九冊 難破後記 一冊

新撰基經 (二月十八日便り、亀嶋へ行く) 三冊

古基躰華 (二月十八日便り、亀嶋へ行く) 六冊

御城基 三冊 争十六番 一冊

道回可門集 一冊 佐々木基 一冊

五十番 (二月十八日便り、亀嶋へ行く) 一冊

女學範 二冊 婦通鑑論草 五冊

英草紙 五冊 運氣算法 一冊

省文集 一冊 装束記 一冊

祭式十有二 一冊 中興武家盛衰記 四冊

武玉川 五冊

● 林

関ヶ原軍記大全 五八冊 前太平記 二二冊

萬葉捨穂抄 三十冊 謡本内百番一函 二二冊

謡本内百番一函 二十冊 謡本半切本二函 十冊

謡本外百番半切本一函 五冊 萬宝全書 十三冊

太閤真蹟記 三百六十冊

◎ 萬控記のなかの「書物目録」 安永八年七月識

伊能景敬十四才 伊能盛右衛門二十四才 忠敬は三十五才

風俗文選 関ヶ原大全 礼記 武田三代記

三遠日記 本朝三國志 続通俗三國志 四海太平記

前太平記 東漢記 古今真宝諺解大成

通俗三國志 四漢記 論語中庸 北国太平記

西国盛衰記 孟子 東国太平記 日本書紀

古道仙伝 漢楚軍談 神代卷 伊勢物語

沙石集 保元平治 女學範 日本永代蔵

近思錄上下 古今和歌集 後太平記 農業全書

便蒙詳説 便蒙詳説附録 甲州武田日記 近思錄集解

新編鎌倉志 田舎莊子 東鑑 古今全集

明元算法 甲陽軍鑑 鑛灸祓華大成 ○算法天元録

北条五代記 行脚文集 新撰基經 源平盛衰記

小学句詠 三蔵弁解 太閤記 尺牘青錢

阿羅野 王代一覽 唐詩訓解 孝經釈名

基經 詩経易春秋 筌蹄 和漢朗詠集

兵学指南 兵方大成論 事真宝合解評林 三十六歌仙

一字幽茶集 東朝四家絶句 梅尾明恵上人誌記 孝経便蒙

● 合不足本分

太平記大全 (残有三九冊) 基經五冊 鑑草五冊

観音感応集十冊 杜律集解三冊 楽訓三冊 宝永千年記七冊

神仏感応録八冊 文書草紙二冊 桜井書 語園二冊

方丈記二冊 百法句二冊 清正記一冊 仏書二冊

算本四冊 誌学三冊 三体詩四冊 杜律集三冊

※ 註釈

・書名の上の○印は、現存していて、国の重要文化財に指定されているもの。□印は、津宮行きの分(久保木漬淵)と重複分。また、「・」印は、「旧蔵目録」と「萬控記の書物目録」と重複図書。

(つづく)

(さくま たつお・伊能忠敬研究家)

伊能大図総覧の地名と景観(三)

星 埜 由 尚

今回は、北海道の日本海側の要所を見てみよう。

稚 内

伊能大図第12号が現在の稚内、宗谷岬などを含む範囲の図である。この図は、海上保安庁海洋情報部が所蔵する図で、明治初年に当時の海軍水路局が模写したものである。他の模写図と異なり、山景は、いわゆるケバ式で描かれており、測線も海岸線と一致するところは、海岸線を優先している。そもそも、海図の作成のために模写したものであり、若干の加工が施されている。しかし、海岸線を除いて、測線が朱線で示されており、宿駅記号などもあり、紛れもない伊能大図の模写図である。

この図を見ると稚内に当たる地名は記載されていない。野寒布岬は、ノツシャム岬となっている。納沙布岬の半島の両側を比べると西側の海岸には草地や樹木の絵記号が多数描かれているのに対し、東側の海岸には数本の樹木を除いてその様な表現が全くなく、数ヶ所に黒抹記号が描かれ、集落のあることが分かる。また、東側の海岸は、砂浜海岸であることが分かるが、西側の海岸にはその様な表現はない。

このような地図表現から、納沙布岬半島の西側には、海岸に沿う湿原が発達していたのに対し、東側は、湿原はあまり見られず比較的高燥な土地であったのであろう。明治以降に稚内市街の発達するのは、この東側の海岸に沿ってであることもうなずける。

納沙布岬と宗谷岬に挟まれた海は、現在宗谷湾と呼ばれているが、宗谷湾に突き出ているウエンノツ岬（声問岬）は、海蝕崖の発達する様子が描かれおり、測線も海岸線にとることができず海蝕崖の上を測量している。しかし、現在の地形図では、声問岬の海岸線は平滑で海蝕崖は見られない。また、岬の海岸線も伊能大図では地形図より多少

とがった形態をしている。ウエンノツ岬から東側には草地や樹木が広がっており、森林や湿原が広く分布していたのであろう。

ウエンノツ岬と納沙布岬半島との間の海岸には、この図の中でも他の海岸沿いには見られないモヤモヤと藪のようなものが描かれている。これは何であろうか。描き方からして、樹木と草地で表現されている湿原とは明らかに異なる。この部分の海岸には砂浜の記号は描かれておらず、さりとて露岩の見られる岩石海岸の描き方ではない。地形図を見ると、現在このあたりは、標高50m前後の開拓された台地となっており、竹林の記号があり、笹藪が広いことが分かる。このようなところから、問題の場所は、クマザサに広く覆われた歩行困難の土地であったのではないだろうか。

小樽・積丹周辺



第1図 大図12号稚内付近(海上保安庁海洋情報部所蔵)



第3図 大図第18号の一部(南北は逆)



第4図 大図第20号小樽付近(上が西)



第2図 2万5千分1地形図「稚内」の一部を縮小

第3図は、石狩平野の日本海に面する海岸が終わり、小樽に向かって続く岩石海岸の部分である。第4図は、それに続く小樽周辺の図で、ヲタルナイが現在の小樽に当たる。「ハルシ」と記された地名は、第5図2万5千分1地形図の「張碓」に当たるものと思われる。レブンノツカ川のほか、小河川が多数描かれているが、レブンノツカ川は、礼文塚川として地形図には記載されている。ハルシに集落記号があるが、海岸は海蝕崖が発達している様子が表現され、険しい断崖の間を縫うように測線が通っている。カムイコタンと書かれたあたりは、天をつくような崖が迫っていたのであろう。海蝕崖が二段になって聳えている様子が表現されている。現在、この海岸は、崖下に函館本線が通っており、神威古潭の地名が地形図にも表示されている。神威古潭には、ニシン漁の最盛期には37戸の人家があったそうだが、大図にカムイコタンと書かれたあたりに集落記号は見られない。

第4図は、現在の小樽市内に当たる。ヲタルナイ、テミヤ(手宮)、タカシマ(高島)と言った現在も残っている地名が見られる。集落記号が多数見られ、当時からヲタルナイ場所が設けられ、かなり開けた土地であったのであろう。

第7図は、積丹岬の付近の大図である。積丹半島は、険しい海蝕崖が続く、近年まで一周する道路が未通であった地域である。第8図のような海蝕崖が続く、豊浜トンネル崩壊の大災害も記憶に新しいところである。大図を見ると、測線は、海岸線を辿っていないが、海蝕崖の上やその間を通過していることが読み取れる。伊能忠敬は、積丹半島には足を踏み入っていないが、間宮林蔵のデータに基づいて図化されたと言われており、その測量には想像を絶する苦労があったであろう。

宿駅記号の付されているシャコタンと記された集落が描示されている。現在の積丹町日司町ひづのに当たると判断される。

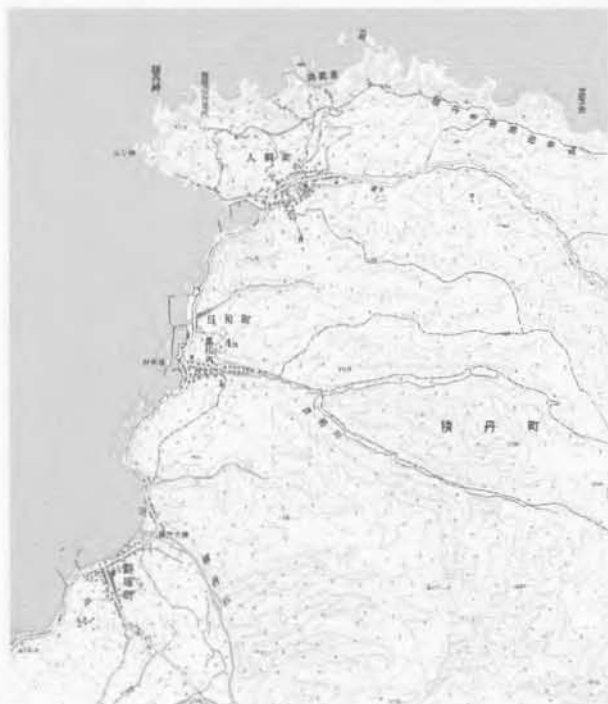


第6図 2万5千分1地形図「小樽東部」を縮小



第5図 2万5千分1地形図「小樽東部」「張碓」を縮小

一方、積丹岬の西に当たる神威岬のすぐ東にはライケシと書かれたところがあり(第7図からは外れる)、18世紀末頃から松前藩の運上家があったそうである。しかし、大図にはライケシと小さく書かれた地名があるのみで、シャコタンの方が大きく記され、宿駅記号も付されている。伊能測量当時の積丹半島は、ニシン漁が盛んで、商人による場所請負も行われて賑わいがあったのであろう。



第9図 2万5千分1地形図「積丹岬」を縮小



第7図 大図第20号積丹岬付近



第8図 積丹岬付近の海蝕崖

雷電海岸

積丹半島の南、岩内から南に下った海岸は、同様に切り立った崖が続く通行困難な海岸であった。蝦夷三嶮の一つといわれた雷電山道は、伊能測量の頃に開削され、海岸を避けて雷電峠を越していた。大図を見ると海岸に測線が通じており、極めて通行困難であった海岸を測量して行ったことを示している。積丹半島の海岸と同様に切り立った海蝕崖の様子が描かれており、大変な苦労があっただろうと想像される。現在も峻険な海蝕崖を縫うように国道が走っており、トンネルで抜けているところが多い。途中に雷電温泉があり、旅館などが数軒建っている。



第10図 大図21号雷電岬付近



第11図 2万5千分1地形図「雷電岬」を縮小

インターネットホームページに掲載されていた説を紹介すると、雷電の名称は、①ライ・ニ（枯れ木の意、枯れ木は近くの「弁慶の薪積岩」を指す）②ライテム（焼いてうなる）落雷で山が焼き崩れ、振動した）③ライネン（来年が雷電に転訛、アイヌの人々に義経が来年帰

ってくると言ってここから船出した）④ラエンルム（低い出崎）等に由来すると言われているようである。*1

大図の表現を見ても、急峻な海蝕崖の上を測線が通過し、海岸の地名が多数記載されている。現代の地形図には、刀掛岩の注記があり、弁慶が刀を掛けた岩との伝説がある。第12図の岬の先端の岩がそれである。

*1 yalooなどで「雷電岬」を検索すると「雷電山」と表示されるホームページがある。そこに「雷電」の由来が記述されている。北海道の山についての紹介ページであると思われる。

江差

第13図は、江差追分で有名な江差の付近の図である。この図は、秋岡武次郎氏の旧蔵で、国立歴史民俗博物館が所蔵しているものである。アメリカ大図と同系列のものであるが、色調は、アメリカ大図とはやや異なり、全体的に明るい。また、地名等の字体もやや異なるようである。「第七軍管北海道之圖」の裏書きはアメリカ大図の彩色図と共通で、アメリカ大図の彩色図と同じくして写されたものであることは間違いない。



第12図 雷電岬 刀掛岩



第14図 2万5千分1地形図「江差」を縮小

現在の江差は、「江指」と書かれている。現代の地形図を見ると、姥神・中哥・五勝手、豊部内、濱茂尻、アイトマリなどの地名が町名、河川名などに残っている。辨天島は鷗島と名称が変わり、嘗ては島であったが、現在は、埋め立てが進み、陸繋島のようになっている。ゴカツテ川の河口の沖合には、ヒラ島と無名の小さな島とが描かれている一方、現在の地形図には、岩礁は描かれているが、島はない。江指・を中心にして、集落記号が多数描かれており、辨天島にも黄褐色の家並みの記号が書かれている。



第13図 大図34号江差付近
国立歴史民俗博物館所蔵

(第1図と第13図を除き大図はすべてアメリカ議会図書館所蔵。地形図は、すべて国土地理院発行の2万5千分1地形図を適宜縮小)

(ほしの よしひさ・(社) 日本測量協会副会長、代表理事)

川上清さん監修 茨城新聞社から発刊

「ウォーキングガイド茨城」

楽しく歩いて健康づくり

ご縁があり、茨城新聞社からのお話を受け約二年ほどを掛けこのほど一冊の本が完成しました。

今ウォーキングは大勢の方が取り組むようになり、順風をあびたスポーツになりました。

ですから製作には力が入り、歩き、写し、感想をまとめました。コースが増えるほどに茨城は広く、そして美しい県土でした。

完璧とはいかないまでも、新聞社のご支援を受けて監修本として発刊にこぎつけました。茨城県には過去に無くはないのですが、今のスタイルで民間人からのものは久しぶりの刊行といえると思います。エキ스는本に全て吐き出しました。どうかご活用ないしご高評下さいませればこの上ない幸甚でございます。

(かわかみ きよし・茨城県ウォーキング協会副会長)



「伊能大図謄写図」調査概報（二）

鈴木 純子

四、調査の記録から

調査には地図一点ごとの記録用紙を用意し、必要事項を記録、さらに終了後そのデータを表の形式に取りまとめた。前述（48号）のとおり、表はページ数の関係で、この報告には収録していない。

縮小、改変の手が加わった転写図が大部分というのはそのとおりであるが、それらの図も含めて、模写の質は非常に良好であるというのが全般としての評価である。

今回の調査で確認できた点は、概略つぎのようなものである。

海洋情報部所蔵の各図が伊能図の何号にあたる図であるか、それぞれ全図か、あるいは部分図かを確認し、伊能大図の号数と海洋情報部の番号との対照を可能にした。一つの図が数ヶ所に重複して収録されているものもある。

一四七枚の図の中に、部分・略写なども含む何らかの形で関係している大図は一五〇図余りに及ぶ。

従来の報告にもあるとおり、地図は伊能大図の描画形式どおりに写した「伊能図式」（鳥瞰図式）の彩色図（48号参照）と、山地をケバで表現するなど「平面図式」に改描した図（写真6）の、大きく二種の形式に分けられる。このうち、伊能図式の図はさらに原寸の模写図と、縮小模写図の二種に分けられる。平面図式の図は全て縮小図である。

種類別の枚数は、伊能図式では原寸模写図が六枚（二枚は重複、一



写真6 第100号 甲斐駿河の部分（「けば」による平面図式）

枚は集成図)、縮小模写図が単独図四四枚(五枚は山・島の遠景のみ)に、集成図、部分図を合わせて六三枚、平面図式は六九枚で、集成図二枚、部分図一枚を除く六六枚は単独図である。なお、平面図式の図は大多数が山地を「けば式」で表現するものだが、なかに二枚(単独図一枚・集成図一枚)だけ、「けば式」ではなく等高線的な水平曲線(フームライン)式の図(写真7)がある。以上のほか、形式の特定しにくい略写図が九枚で、合計一四七枚である。形式の特定しにくい図は九枚としたが、伊能図式とするか、その他とするかの線引きは微妙である。

原寸模写図中の三枚は模写図としては最高のレベルに属する優品である。報道でも特に強調された部分である。海洋情報部番号一四〇・一三九・一二四(伊能大図号数で一八一・一八三および一八五号、別府・大分、佐伯、宮崎)がこれにあたる。

縮小図のなかにも精緻に写された優れた図が多数みられる(写真8)が、簡略な図も混在し、玉石混淆の状態である。単独図だけでなく集成図中にも一図の図郭がそっくり含まれているケースが多い。大図一図の図郭が保持されているものを拾いあげ、簡略化の著しい図を除くと、縮小模写図として姿をとめている伊能図式の大図の図数は七〇図前後となる。全図と部分図の判定などに確定しにくい部分もあるので、この数字は概数としておきたい。

表1に、伊能図式の模写図で、内容、描写の特に優れていると思われる図を集めてみた。備考欄の所見は、調査時に瞬発的に述べられた感想の一部を書きとめたもので、必ずしも一貫した基準にもとづいての判断ではない。

伊能大図の変形バージョンともいえる平面図式の図は、伊能図式の図と比べると、書写のレベルが比較的一定しており、伊能図の骨組み



写真7 第48・52号 松島湾の部分(フームラインによる平面図式)

表1 伊能図式模写図の優品

伊能図番号	海保番号	収録地域	備考
42	63	八甲田山(山のみ)	美麗、色使い繊細
48	53	石巻・金華山	鮮明な写図、コンパスローズ美しい
60	114	能代・森岡・大館	書き方ていねい
75	102	佐渡	日焼けあり、斜め方眼記入
82	96-2	魚津	斜め方眼あり
135	65	大坂・奈良	プラスマークで潜岩表現、議会図書館図あり
137	69	神戸・明石・淡路	美しいが歴博図がbetter、山やや粗い
139	68	和歌山・淡路島	美麗、海・水色、番号表示138号と誤記
142	78	鳴門海峡・小松島・淡路島	やや雑
144	91	赤穂	緑濃い、文字良し、内陸まで忠実に写す
146	79	高松	高松城の水濠を描く
152	80	金毘羅・川之江	美麗
169	72	安芸・平生・屋代島	原寸だが、山に樹木なし、海から見た形で山を描く、設標位置記入
174	85	須佐・見島	見島の位置、紙面に合わせて移動(注記付)、毛利図あり
181	140	別府・大分	原寸、地名修正(朱)少々、鶴見嶽、コンパスローズ良
183	138	佐伯・津久見	原寸、城・コンパスローズ彩色良い、下図と重複
183	139	佐伯・津久見	原寸、美麗、国会図よりやや簡略、上図と重複
185	124	佐土原・高鍋	原寸、全体として美しい
189	118	唐津・呼子・	唐津城立派
191	119	壱岐	壱岐本島のみ、二神島は枠外
197	136	霧島山・小林	議会図書館図を上回るレベル
198	135	油津・都井岬	議会図書館図を上回るレベル、コンパスローズ美麗
201	122	大村湾	議会図書館図を上回るレベル
204	121	平戸島	美麗、松浦図あり
209	132	鹿児島・桜島	桜島に噴煙
210	130	串木野・枕崎	議会図書館図を上回るレベル
211	131	佐多岬	議会図書館図を上回るレベル
212	129	甑島	コンパスローズ美しい
213	143	種子島	小河川を細かく写す
214	144	屋久島	口永良風遠景
154P・155	88	米子・境港・地蔵崎	全体として美麗
176・177	74	山口・宇部・萩	油谷湾に水深・底質・細かい方眼を記入、毛利図あり
193・195・ 196・200・ 202・203	125	肥後沿海図、天草海湾	原寸、196は全、他は未確定、寛政4年湧出新島の島名丹念に移す(引出線使用)、傷みあり、
206・207	127	五島列島	大瀬崎に鉛筆の灯台注記
195・196・ 200・203・ 205	128	薩摩	議会図書館図を上回るレベル

をなす海岸線、街道、目当てとした山頂の位置、地名などを忠実に再現している。「けば」や畑地の記号などが古典的な美しさをみせている。近代図の衣をまとった伊能図としてユニークな一群である。

縮小図の縮小率については、これまで、原図（三万六千分の一）の二分の一から四分の一とされてきた。縮小率を厳密に算出することは不可能であるが、総覧との比較で算出したところでは、原図の五分の二前後の縮小率のものが大多数である。多数図を集成している広域図には六分の一、つまり中図の縮尺まで縮小した図もある。海洋情報部番号七七（伊能図号数一七四、一七六、一七七、石長周海岸）および、八二（一四八、一四九、一五九など、土佐南岸）の二点である。

一部の図に模写担当者の姓名または姓、作業日付が記入されている。作業日付は五件のみ、明治一三年が三件、一五年と二一年が各一件である。明治二一年とあるのは約六分の一に縮小されている土佐南岸の集成図である。大部分の図の転写が行われたのは、もともになる模写図の作成から間もなくであり、六分の一縮小の広域集成図は遅れて、別の機会に作成された可能性がある。

五、調査を終えて

はじめて全容に接した海洋情報部の所蔵図は、海図作成の技術者たちの手になるものだけあって、全体として予想以上に精細であり、景観表現などの緻密なものが多い。失われた伊能図の全容を復元するための有力な手がかりにできる貴重な模写図群であることをあらためて確認することができた。これからの活用を期待したい。

調査が困難であった事情はあるとしても、着色された模写図を『伊能大図総覧』に採用できていればとの心残りも否定できない。

書写の時期や作業者名の記載、海岸測量用の旗標位置を記入した図、地誌提要、他の地図による補記（知床半島）など、明治期における伊



写真8 第144号 播磨 美作 備前 赤穂の部分
（伊能図式の縮小模写図）

能図利用の痕跡もこの一群の図の中に残されている。

調査対象が集成図も含む全一四七枚と大量で、限られた時間内での作業でもあったため、詳細調査とはいえないが、見落とし、記入ミスなども多々残っていると感じている。今回の記録データを基礎として、さまざまな機会にデータを充実させることができるよう願っている。

完

（すずき じゅんこ・日本国際地図学会評議員、新事務局長）

「旅のフォトスケッチ」

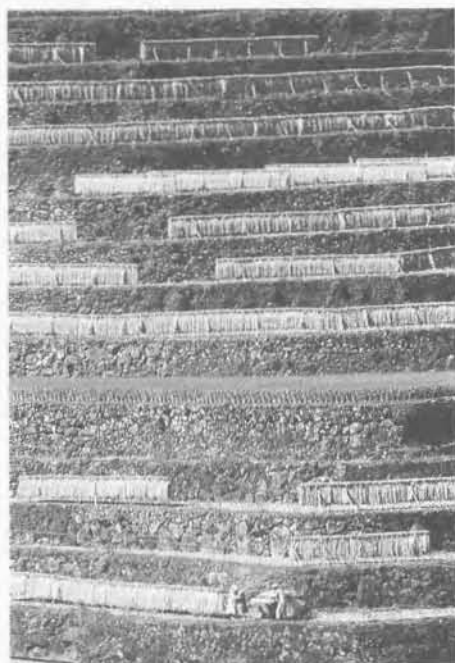
野田 茂生

この度、「古希」を迎えたのを機に、長年撮り溜めたものを「写真集」にまとめてみました。

私が、伊能忠敬に惚れ込んだのも「旅好き」が原因の一つですが、若い頃からひとり旅を中心にカメラを持って全国各地を歩き廻りました。

外国は、「安全」と「経済力」が理由で、専ら観光ツアーに乗っかりましたが、その旅先での感動や想いを何とか形に残したいと思い、カメラに納めて来ました。溜った写真もかなりの数になり「旅のフォトスケッチ」として作品集にまとめてみました。

作品の選択からレイアウトまで、全くの自己流の拙い作品集ですが、自分なりに満足感を味わっているところです。



「棚田の秋」星野村(福岡)

旅のフォトスケッチ

野田茂生「古希」写真集



「アルプスを往く」(フランス)

(のだしげお・NHKOB)

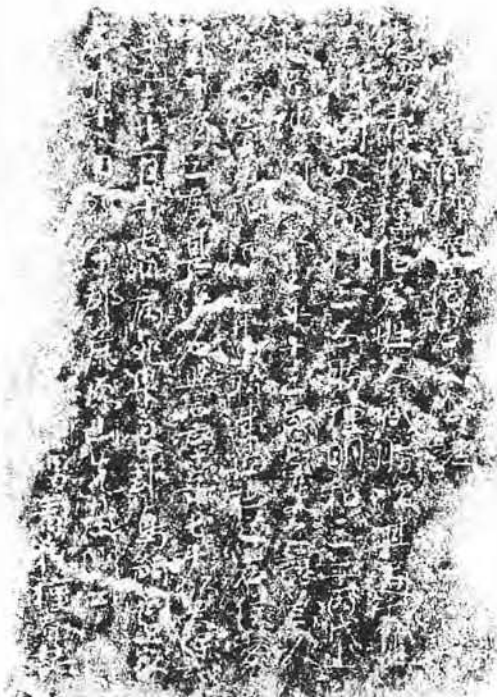
青柳種信夫妻の墓誌

國重 正樹

私は現在九州の某私立大学に在籍しています。今年で五年目になります。退職後一年目は聴講生、二年目は運よく大学院に合格できました。大学院での二年間は『青柳種信の筑前考古学』というテーマで勉強しました。今回の『青柳種信夫妻の墓誌』は修士論文をもとに四年目に書いたものです。この修論・小論は担当教授を初め多くの人の助けによって出来上りました。この五年間の学生生活は、私の人生で一番楽しいものです。しかし勉強生活は老化した脳には過酷で惨憺たるものです。

伊能忠敬の「見事なり、二度の人生」注は私の理想です。六年目は聴講生に再び戻るのか、違う道を進むのか、しっかり考えます。変らないのは、この理想を胸に「鈍は鈍なり」に「青柳種信」を追い続けることです。

注『伊能忠敬 見事なり、二度の人生』 川村優著 平成六年 東京書店



種信の石蓋の拓本(福岡市博物館蔵)

青柳種信君之墓誌

先國青柳種信君姓大藏勝次其通称也
号柳圖父称利三太勝種明和三年丙戌生
福岡地行之家生十三歳学業之謹為人
功学得通和漢之書称事四世之君候愛
賞十有三度基得名譽享年七十以天保六
年乙未十二月十七日病死早良郡鳥飼邑家
本月十八日葬本郡龜原山先塋□

男 青柳種春誌

(くにしげ まさき・青柳種信研究家)

今井八九郎の「室蘭図」(二)

井口 利夫

(3) 今井八九郎「室蘭図」と松浦武四郎

18世紀以前の蝦夷地の地図情報は場所請負人の必要を満たす程度だったが、異国船出現の頻発によって海防上必要な情報が求められるようになってから、地図の情報量と精度が一段と向上した。18世紀末には、蝦夷地についても地形図といえる程の精度の高い図が作られ始めた。

北海道には万を越えるアイヌ語の地名が残されているが、アイヌの付けた地名には広域地名というものが無く、小地域を指す地名ばかりである。このため、文献上の地名の位置を検討するには、細かい地形を詳細に対比する必要があるが、大縮尺の地図が欠かせない。この点については既に本誌に報告したことであるが(注⑨)、伊能間宮図大図はその中で最も古い位置づけであり、アイヌ語地名研究における価値は甚だ大である。

19世紀に作られた室蘭地方の絵図類の中には、アイヌ語地名の位置を検討するのに十分な大きさの3万分1前後の大縮尺の図が今井八九郎図を含めて数点あり、その内6図のアイヌ語地名を比較表にして、その表記の変遷を詳細に検討したことがある(注⑤)。

- ・伊能忠敬・間宮林蔵『大日本沿海輿地図』大図 注⑩
- ・今井八九郎『室蘭図』
- ・松浦武四郎『初航蝦夷日誌 卷之七』所載「エトモの澗の図」
- ・南部藩『蝦夷南海岸圖一』北大図書館蔵 注⑦

- ・『膽振國室蘭郡全圖』室蘭図書館蔵 注⑪
- ・参謀本部陸地測量部『仮製五万圖』 注⑫

この内3番目の松浦武四郎の「エトモの澗の図」は図3でご覧のような絵図で、他の5図と比べるととも地図といえるようなものではない。ただ、アイヌ語地名が豊富に記載されていることがかねてから気になっていたので、地名比較のために検討に加えてみたのが経緯である。

松浦武四郎は幕末の蝦夷地探検家であり、箱館奉行のお雇いとして蝦夷地の調査と建言を行った蝦夷通であり、多くの取調日記類を残している。又安政七年(1860)には、収録地名1万を超える大作『東西蝦夷山川地理取調図』(全26枚)を刊行している。維新後はその知識と経験を請われて開拓判官として開拓使に出仕し、北海道国郡名の提案者としても夙に有名である。『初航蝦夷日誌』は松浦武四郎にとって最初の蝦夷地紀行である弘化二年(1845)の記録と翌年の再航時の記録の一部を纏めたもので、「エトモの澗の図」は「卷之七」の挿絵である。

「エトモの澗の図」については前述のように、ほんの参考のつもりで比較表にいったのだが、表に書き加えてゆく内に、記載内容が『今井八九郎図』の内容とよく似ている、という意外な事実気がついた。絵図の形は全く異なるので、全く予想もしなかったことだが、驚いたことに、ほとんど違いが無いと言ってもよいほど、極めてよく似ている。特に顕著な類似点を挙げてみると、

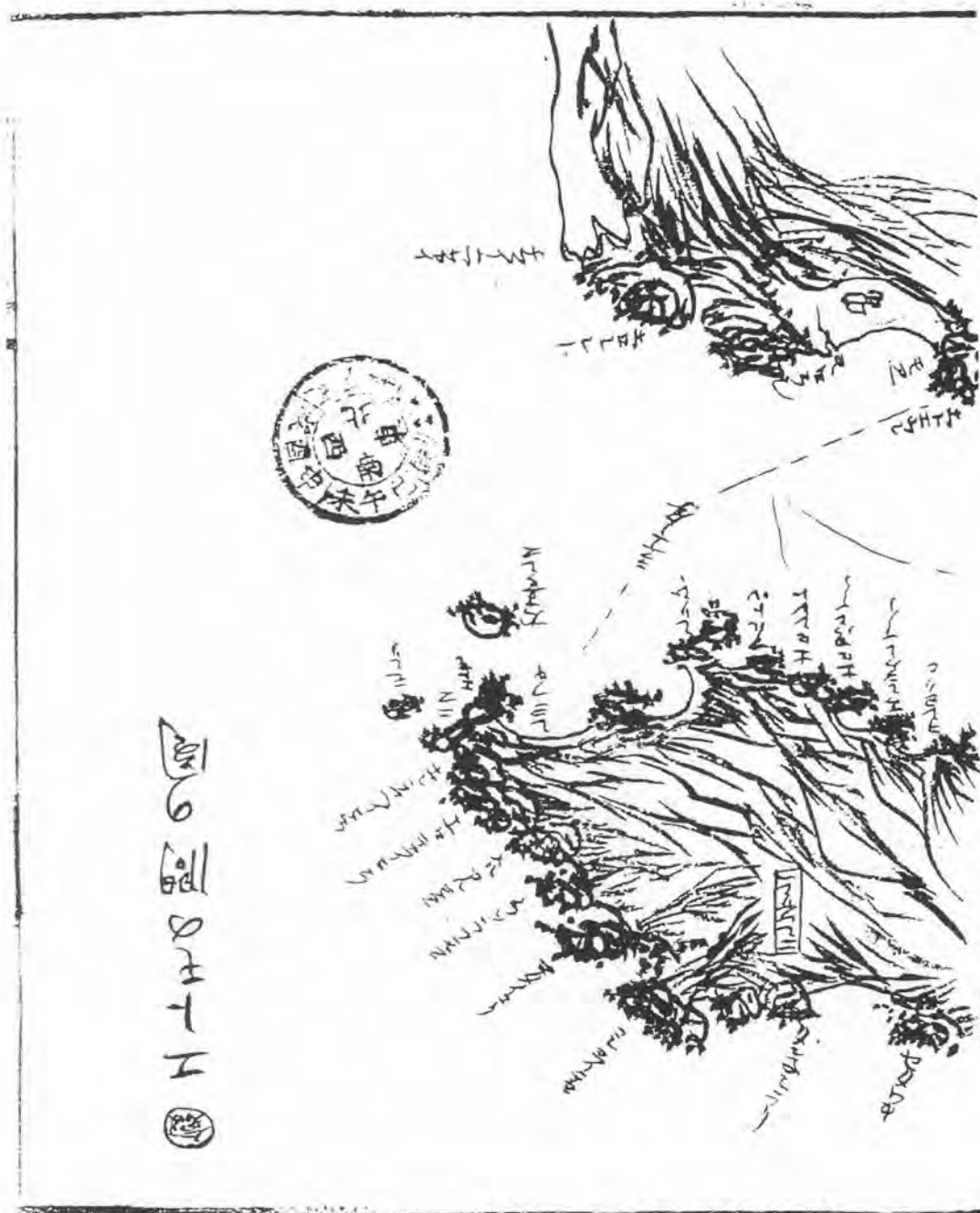
- ・絵鞆半島外海部は間宮林蔵も未測量とした難所で、この部分の地名は諸図の間で特に相違が著しいのだが、これがほとんど一致し



図3 エトモノ澗の図

松浦武四郎『初航蝦夷日誌 卷之七』所載

(2丁貼合せ 上下逆転させ、北を上にして示す)



ている。その他、湾内の距離を示す記事（南北方向2ヶ所、東西方向1ヶ所）についてもよく似ている。

・エトモ場所（室蘭市）の地図としては、ホロボツ場所（登別市）との境界のワシベツ（鷺別川）まで描くのが普通なのだが、両図ともそのずつと手前のウトナンカルウシ（図3の右下部分）までしか描かれていない。

特に二点目については、今井八九郎図の場合は縮尺が一定であるから、東側の隣接図とのつなぎ合わせの都合で、隣接図と重複する部分を省略したという技術上の都合である。しかしながら、松浦図にはそういう理由は全く無いのだから、「エトモの澗の図」としては更に東のワシベツまで描く方が自然である。これは松浦武四郎が今井八九郎図を写したと考えなければ説明のつかないことである。

今井八九郎図については札幌中央図書館図と北大図書館図とで記事に若干の違いがあるが、松浦図の記事がどちらの図の方に近いからいえば、北大図の方に近いと言えそう。例えば、ホコエ（ボコイ＝母恋）の地名は両図とも記載が無く、北大図の方には、そこに「谷地」と書かれている（図1、右側中央の十字折り目の部分）。松浦図にも地名が無く「谷地」とのみ書かれている（図3、※↓で示す）。ただ、北大図より札幌中央図書館図に近い記事（海上記事の一部）もあり、両図に共通する測量原図などから引写したのかも知れない。

松浦武四郎の「エトモの澗の図」の地名が詳しいことから、かねてからその出所が気になっていたのだが、作表してみても初めて今井八九郎図からの引写に違いがないことに気がついた。図の雰囲気有余りに違うので全く気がつかなかったのだが、各図の記事の詳細な比較表を作ってみて初めて気がついたことである。

松浦武四郎は「松前藩秘蔵の精密の地図」を手に入れたとの説があり、佐々木利和氏はこの「精密の地図」を今井八九郎図だろうと推測している（注②）。前述のように北大図書館図の完成は札幌中央図書館図よりかなり遅く1841年頃と推定される。松浦武四郎は測量原図を見ていたことも考えられるが、若し北大図書館図の方を引写したとしても、弘化二年（1845）の初航以前に北大図書館図を実見することは可能だったことになる。

なお『初航蝦夷地誌』にはこの他にも気になる点がある。それは本文中に引用されている「蝦夷地行程記」についてで、これには図の中にある地名に加えて、各地名間の距離まで記載されている。この「蝦夷地行程記」に該当する史料についても今のところ不明である。仄聞によると、今井八九郎は詳細な『蝦夷地東西里数記』を残しているとのことだが、あるいはこれが「蝦夷地行程記」の出所ではあるまいか。

松浦武四郎が後年の調査に基づいて執筆した『竹四郎廻浦日記』にもエトモ（室蘭）図はあるが、採録地名数はずっと少なく、その後も、松浦武四郎はこれだけの地名を載せた室蘭図を世に出したことはない。今井八九郎図との関係については何かしら公にできない事情があったのかもしれない。ただ、松浦武四郎は嘉永七年（1854）の『三航蝦夷全図』（全14枚）の「凡例」中に、「諸図を見たが今井八九郎図が最も参考になった」という趣旨のことを書いているという（高木崇世氏私信）。

松浦武四郎が最初に蝦夷地を紀行した弘化二年には、今井八九郎は松前藩の先手組で55歳、丁度間宮林蔵没後10年にあたる。先に紹介した間宮鉄治郎と今井八九郎との出会いはその9年後のことである。

間宮林蔵に関する史料はあまり残されていないことだし、今

井八九郎についても佐々木利和氏の研究の他は未だ広がりを見ていない。伊能忠敬の孫弟子今井八九郎と探検家松浦武四郎を結び付ける手がかりは、まだ何処かにひっそりと埋もれているに違いない。

あとがき

最初に触れたように、本会事務局の福田弘行氏の熱心なお勧めとアドバイスがなければ、本稿がこのような形で目の目を見ることは無かった。また、本稿をまとめるに当たって、本会会員高木崇世氏からは今井八九郎と松浦武四郎に関する諸資料について貴重な情報をご提供頂いた。記して両氏への感謝の意を表したい。

終

【注】（一部前回分を再掲）

- ①「今井八九郎図の縮尺について」・②「同一補遺」井口利夫
『アイヌ語地名研究会会報 26号・28号』06年
- ③「今井八九郎の事蹟」谷澤尚一・佐々木利和『北の文化 41』79年
- ④「今井八九郎作成の蝦夷地図考」佐々木利和
『MUSEUM No 352』80年
- ⑤「19世紀の室蘭図に見るアイヌ語地名」井口利夫
『アイヌ語地名研究 9』06年
- ⑥「今井信名経歴一斑」今井徹
大正3年 東京国立博物館
- ⑦『蝦夷南海岸圖一』約1/2・6万 北大図書館蔵
安政年間（1850年代後半頃）南部藩作成 極彩色 量物 南部藩が
警護を命じられた東蝦夷地の海岸図（4枚組）の一部
- ⑧『東西蝦夷地大河之図』今井八九郎 天保5年 東京国立博物館
- ⑨「伊能大図とアイヌ語地名研究」井口利夫 『伊能忠敬研究 40』

⑩『大日本沿海輿地圖』1/3・6万 米議会図書館蔵

文政4年（1821）上呈。北海道部分全37図の大部分は伊能家
控図からの明治初年の模写図。（北海道部分は文化14年（1817）
までの間宮林蔵の測量成果に基づくと推察される）

⑪『膽振國室蘭郡全圖』約1/2・5万位 室蘭図書館蔵

明治5年（1872）頃（仙台藩角田領石川家臣移住関係者の作
成図かと推察される） 極彩色 原折図（現状軸装）

⑫『仮製五万圖』1/5万（全道284図の内室蘭部分4図）

明治29年（1896）製版 参謀本部陸地測量部

その他参考文献

- 「埋もれていた蝦夷地測量師……今井八九郎地図のこと」（上・下）
佐々木利和『北海道新聞』S 58・10・7/8
「今井八九郎の蝦夷地図考ー和人地関係図を中心にー」佐々木利和
『松前藩と松前 21号』S 59年1月 松前町史編集室
『北海道古地図集成』高倉新一郎 87年 北海道出版企画センター
『日本北辺の探検と地図の歴史』秋月俊幸 99年 北大図書刊行会
『伊能忠敬と日本図』03年 東京国立博物館
『校訂蝦夷日誌 一編』松浦武四郎 99年 北海道出版企画センター
『竹四郎廻浦日記』松浦武四郎 88年 北海道出版企画センター
『東西蝦夷山川地理取調図』安政7年 松浦武四郎
「間宮林蔵の東蝦夷地測量」井口利夫 『伊能忠敬研究 41』05年
『膽振國室蘭郡全圖』について 井口利夫 『茂呂瀾 39』05年

（いぐち としお・アイヌ語地名、松浦武四郎研究家）

忠敬先生関連の或る古書をめぐって（一）

秋間 実

はしがき

さきごろ東京の或る有力な古本屋さんから送られてきた豪華な目録の終わりのほうに、小さく、伊藤至郎著『伊能忠敬・鈴木雅之』伊藤書店（昭和十六「一九四二」年）、と出ているのが目にとまり、とたんに久しぶりに胸のうちが沸き立ちました。さっそく発注し、現物は日ならずして到着しました。見るからに質素な本で（フォト、参看）、（ほぼ）B6版で並製三〇〇ページたらず、黄ばんだざら紙のような粗末な紙（仙花紙？）に、泥くさい感じの活字が、もちろん旧字体・旧かなづかいで、たっぷり印刷されています。奥付を見ると、同年九月十五日刊行——あの真珠湾攻撃のわずか三か月たらず前、ということですね——、定価二円、とあります。当時、中学一年生であったこの身にも、物資の欠乏は日々身にしみて感じられてはいましたが、もう少し明るい感じのましな本もまだ店頭にあったのではなかったか、という記憶がなんとなくあります。が、わたしとしては、貴重な掘り出し物を手に入れたわくわくした気分でした。いまでも仕合せです。

この古本にこれほど興奮させられたのは、なにによるのでしょうか？ 一つには、非常に視野が狭くまた怠惰なわたしの古本さがしのなかで珍しく目にはいった、忠敬先生関連本だということによりますが、二つには、それにもまして、以前からずっと気にかかっている伊藤至郎という篤実なヨーロッパ数学（史）研究者が、昔の日本人二人



を主題とした本を書いた、ということによります。つまり、わたしは、なによりも、この三つの名まえの取り合わせの意外性に衝撃を受けたのです。

この小さな本は、会員諸兄弟にはとうに知られているものでしょうか？ そうかもしれません。もしかしたらしかしそうではないかもしれません。そう考えて、以下、まず著者について、ついで本自体について（最後にはその前半「伊能忠敬」の中身について）、いくらか紹介させていただくことにしました。

著者・伊藤至郎のこと

1

じつは、手もとにすでに一冊、この人の著書があります。伊藤至郎

著『対応の学としての数学』真善美社（書名・出版社名の表記を新字体に改めました）（昭和二十三「一九四八」年十月）がそれで、同じように粗末な紙を使ったA5版二五〇ページの地味な本（定価二五〇円）です。巻末に（一九九一年十一月十三日に逗子で手に入れた）と書き付けてありますから、今回と同じく通信販売で古本として自宅へ取り寄せたことに間違いありません。——むかし、一九七〇年代か八〇年代かの或る日、東京のどこかで、なにかの折りに、尊敬する古在由重先生（一九〇一—一九九〇）から、（旧・唯研）の仲間に伊藤至郎という人がいた。この人の学問的業績は、もともとともに評価されていたのではなからうか？、とじかに言われたことがあります。わたしは、この時はじめて「伊藤至郎」という名まえを知り、先生のこのメッセージがその後ずつと頭のどこに残っていました。そうでなかったら、どの古書目録を見てもこうした書目が目にとまるというようなことはなかったでしょう。そして、入手時、まず「あとがき」を読んだ、その控え目な調子になにかしみじみ心に訴えられるものがあつたのを覚えていますが、本文は、古代ギリシア数学をおもに論じた前半に数式と図形とが多いのに辟易して、あまり身を入れては読みませんでした。

（一）「唯物論研究会」の略称。この会は、唯物論的世界観の研究と発展と普及とを目的として、一九三二年十月に設立されて活動しましたが、すでに潰滅させられていた日本共産党の再建を狙う非合法組織だと天皇制司法警察権力の手でこじつけられ、つちあげられて執拗に圧迫された結果、三八年二月に自主解散を余儀なくされました。

このほど「あとがき」を読みなおして、著者がここで自分の出自と

学問的関心とそのこれまでの展開とこの先の展望とについて穏やかに述べることによって、まことに適切な（自己紹介）をしてくれていることに、気がつきました。そこで、かなり長くなりますけれども、その大半を引用させていただくことにします——

「……わたしは特別に数学をふかく学んだわけではない。二十余年の昔に東京物理学校（2）の数学科を卒業したにすぎない。その後もさらにふかく数学をおさめるということもなく今日に至っている。ただその昔においてカントの『プロレゴメナ』などに刺戟されて、少年の胸に哲学者となるためには数学を学ばなければならぬ、とおもうようになり、貧しい農家の子であつたわたしは物理学校をえらび、そこで数学を学んだのであつた。

「……いまもおこころにきざまれているのは（1）掛谷宗一先生（3）の函数論と微分方程式との講義のおりおりになされた余談や雑談であつた。わたしは物理学校では怠けものの劣等生にすぎなかつたが、掛谷博士の独創的な考え方とでもいうべきものにふれることができ、自分なりの尊敬の仕方での師を仰いでいた。わたくしがこころにえがき、またのぞんでいたのは、単なる学問のうけ売り・物まねではなくて思索者・思想者としての学者の面影であつたのだつたら。

「二十余年の歳月はしかしこの鈍根のわたしを哲学者にも数学者にもまた技師にも教育者にもすることができなかった。わたしはいまもなお中途半端な人間として生活している。それゆえ……いまさら……自分の学問の狭く浅いことを弁護しようなどとは思はない。したがって本書の内容の浅薄なことについてはここにしろすうとは思はない。

「ただ、もしも読者がこの種の文章に多少の関心を抱いてくださ

るなら、わたくしはさらに時をえて、これにつづくルネサンス以後の数学の発展のなかに、わたくしなりに問題をとらえ、対応の学としての数学のすがたをたどろうと思う。……

「本書の刊行と前後して、わたくしはなお丹波書林から『数学と弁証法』を、月曜書房から『通路』——或る数学者の思索——を出版することになっている。これらのものは「」二十余年の歳月の間にわたくしがわたくしなりに歩んできた途上のまづしい仕事のうちの、数学や哲学に関係ある文章を集録したものである。これらのものも本書とともに文科方面の方々の一読をえたいと思う。

一九四八年六月四日夜

千葉県一宮町において 著者」。

(2) 現在の東京理科大学の前身、一八八一年創立。へ入学はきわめて易しいが、卒業はきわめてむずかしい、と言われていました。

(3) 高名な数学者で、本務校は東京帝国大学であつたはずです。著書として、わたしの知るかぎり、岩波書店の「高等数学叢書」のなかに『一般函数論』・『高等数学概要』が、同「岩波全書」のなかに『微分学』が、それぞれありました。

このように伊藤至郎が哲学に関心をもった数学者であつたことは、わたしにはもうあらましわかつていふところでした。この人がわが尊敬先生となぜ、またどのように、取り組むようになったのか、それを明らかにすることが、わたしのつぎの仕事になるはずでした。

2

ところが、こんどの本を手にとつて、「序」が一九四一年九月一日に

書かれていることをあらためて確認したとき、わたしは、これが太平洋戦争開始前夜の時期であつたことは別に、自分のうろおぼえではこのころ唯研が弾圧の嵐にさらされているさなかではなかったのか、と思ひいたるに及んで、不意に、猛然、一つの思いに襲われたのでした。それは、もし著者が古在先生のおことばどおり唯研会員であつたのなら、このころ官憲から目のかたきにされ痛めつけられてはいなかったのか？　そもそもどのような（つまり、熱心で積極的な、あるいは、消極的ないわば形だけの）会員であつたのか？　そして、この本をどういう状況のなか・条件のもとで書き、さらに出版に持ち込むことができたのか？　といった事柄をおくればせながらできるだけ詳しく知りたいものだ、という思いです。

こうして、さしあたり手もとにある二、三の文献だけを使って（例によつての不精・怠惰！）いくらか調べごとをしました。その結果、断片的にはありますが、つぎのようなことどもがわかりました——まず、伊藤は、はたせるかな、熱心な唯研会員の一人でした。いつ入会して各種の読書会・研究会などのうちどれに参加していたのかは不明ですが、会の運営自体にも早くから参画するようになっていたらしく、たとえば、一九三五年十一月十日に開催された第四回総会では、書記に任命されたあと、改選された二九名の幹事の一人になりましたし、翌日の第一回幹事会では、財政部に配置されました。また、会の執筆活動の要員としても名まえを出していて、たとえば、一九三六年九月に、〈全国の主要新聞社などに責任をもつて時事・文化など各方面にわたるニュースや評論などを供給する〉という、実質的には唯研が行なう事業の主体として「東京学芸通信社」が設立されたさい、その同人五四名のなかに、三木清・戸坂潤・小倉金之助・中野重治・土方定一・古在由重・松田解子・平林たい子その他といった面々とも

にはいつていましたし、それどころか、推されて、この通信社の社長に就任したのでした。さらに、この年の十月四日に舉行された「秋のピクニック」では、企画委員長を勤めました(4)。

(4) 以上は、渋谷一夫「唯物論研究会の歴史」(4)、『イル・サジアトール』第35号(二〇〇六年五月)、によりました。

もうこの時点(一九三六秋ごろ)において、かれは唯研の中心メンバーの一人であった、と言ってよいでしょう。

ところで、唯研がその時代および後代の日本国民に献げた最大の贈り物は、戸坂潤が中心になって企画し推進した『唯物論全書』全五〇冊——一九三五年五月から三十七年十二月にかけて、三笠書房から、第一次全一八冊・第二次全一八冊・第三次全一四冊、というぐあいに刊行された——であった、と言えるでしょうが、伊藤至郎は、その著者たちのなかにはいつていません。おくれて、第四次唯物論全書と見なせる『三笠全書』第一期刊行予定分のなかには、かれの『日本科学史』が顔を出しています。これもしかし、一九三八年四月から三十九年二月までに実際に刊行された全一六冊のなかには、はいりませんでした(5)。

(5) 以上は、久保昭男『唯物論全書』・『三笠全書』書誌、芝田／鈴木／祖父江(編)『唯物論全書』と現代』久山社(一九九一年五月)所収、二二五ページ以下、によっています。

ここに、興味ぶかい問いが一つ生じてきます。わが『伊能忠敬・鈴木雅之』の巻末に伊藤至郎著『日本科学史』——「科学興隆の叫ばれた今日、私たちは篤実なる科学史家による日本科学の史的展望を得た。ここに書かれたものは」「上代日本からの民族生活と社会的動向に即

した真に科学的な科学史記述の精髓であり、青年すべての必読の文献である」——と広告されているのは、三笠全書に予定されていて出版されなかったあの『日本科学史』と同じものであるうか、という問いです。まず間違いなくそうでしょう。広告には、「B6版函入 三二〇頁 定価二円 十五銭」と具体的に出てもいるので、わたしたちの本よりもすこし早く実際に刊行されたことは確実、と思われまふ。できれば、いつの日にか、現物を手に取って確かめてみたいものです。——もちろん、著者が自分でこの本の「遍歴」について語っているかどうかはわかりませんが。

最後に、伊藤が唯研の中心メンバーの一人として理不尽な思想弾圧にさらされた顛末(顛末)について述べましょう。

一九三八年十一月二十九日早朝七時、警視庁特別高等警察課(特高)は、唯研の全面的破壊を狙って、中心的な主要メンバー一四名を治安維持法違反容疑でいっせいに検挙しました。そのなかに伊藤もはいっていたのです。ここにいわゆる「唯研事件」が発生しました。検挙はこのあと数年にわたって続けられ、検挙された関係者は併せて一〇〇名ほどになったようですが、詳細は不明だそうです。ここでは、話を伊藤とその周囲とに限りましょう。

検挙されたのちのかれの動静については、なにもわかっていません。想像するに、ご多分に洩れず、東京市内のどこかの警察署に——あるいは、たらいまわしにされていくつかの警察署に順番に——留置されて、起訴されるまでのかなりの期間、多かれ少なかれ暴力的な「取調べ」を受けたのでしょう。この間、勉強も執筆もできる状態にはなかったにちがいありません。しかし、この歳月についてわたしに与えられている情報がただ一つだけあります。かれにたいして一九四〇年二

月二十八日に予審請求が行なわれ、一九四一年四月二十二日に予審終結の決定がくだされた、ということです。予審とはなにか？旧法制で起訴のあとに取られた裁判手続きのことです。『広辞苑』第五版によると、「事件を公判に付すべきか否かを決定する公判前の裁判官による非公開の手續」であり、「その判断に必要な事項および公判では取り調べにくいと考えられる事項の取調べを目的とする」のだそうです。これは、裁判官によるものですが、非公開ではあることから、どうもわたしには、被告人の身柄はこの間まだ官憲に拘束されたままであったろう、という気がするのです。つまり、伊藤は、予審終結決定のあとではじめて保釈されていちおうの「自由」を回復し、友人・知人との交流や落ち着いた研究また執筆などができるようになり、公判廷にも自宅から私服でかよい、第一審判決を待ち受ける身になったのではないかと、と思えてならないのです。

なぜこのことにこだわるのかと言えば、それは、ともかくも身辺静穏であったこの時期にあたつたからこそ、伊藤には、九月一日に「序」を書いて本書を世に送る準備を終えることができたのだ、と考えるからにはかなりません。この日々にはあとでまた立ちもどる機会があります。当面は、裁判の進行を終わりで見とどけましょう。

その第一審判決（一九四一年十二月二十六日、あるいは、十一月二十八日。この両説あり、急いで調査して確定しなければなりません）では、伊藤は、懲役三年の求刑にたいして、懲役二年・未決通算三〇〇日、という刑を言い渡されました。ちなみに、戸坂潤のばあい、求刑五年にたいして、懲役四年・未決通算一二〇日、でしたし、ほかの被告人たちにも似たりよつたりの刑が言いわたされました（6）。

（6）第一審判決の日に——判決言い渡しの前？あと？——撮られた『記念写真』が保存されていて、前掲『唯物論全書』と現代の巻頭に掲げられています。伊藤の顔もわずかにのぞいています。



ご覧ください。

「唯研事件」第一審判決の日（1941年11月28日、日比谷公園）

前列左から武田武志、石原辰郎、後列左から伊豆公夫、永田広志、戸坂潤、石井友幸、本間唯一、新島繁、岡邦雄、伊藤至郎、刈田新七、森宏一

このうち八名はただちに控訴し、東京控訴院における第二審の判決は、一九四二年十二月十六日にくだりました。伊藤には、求刑二年にたいして、第一審と同じ刑が言い渡され、戸坂のばあいには、求刑四年にたいして、懲役三年・未決通算一二〇日、と、すこし軽減されました。兩人は、ほかの三人とともに、判決を不服としてただちに大審院に上告しました。

なお、右の第二審判決（の「判決理由」のなか）では、岡邦雄・戸坂・森宏一を「共產主義ニ共鳴スルニ至リタル者」と、永田広志を「共產主義ヲ信奉スルニ至リタル者」と、新島繁・伊藤至郎・伊豆公夫を「依然共產主義ヲ信奉シテ改メサリシ者」と、それぞれ決めつけているとことです。この認定と量刑との関係については、わかりません。

大審院は、一九四四年四月八日に上告を棄却し、これによって刑が確定しました（7）。

（7） 以上は、おもに本村四郎氏の詳細な調査研究『『唯研事件』と治安維持法』、『季報・唯物論研究』編集部（編）『証言・唯物論研究会事件と天皇制』新泉社（一九八九年）所収、九八―一二九ページ、によつています。この本には、「事件」についての証言・意見がほかにも収められていて、参考になります。伊藤への言及もいくつかあります（そのうち、三五ページの「伊藤四郎」は誤記です）。

さて、刑確定ののち、どういうことになったのでしょうか？ ただちに収監、ということではなく、下獄までいくらか時日の猶予が与えられていたらしいです。このたび、『対応の学としての数学』の後半をすこしていねいに読み、その一部「空間論のために」を読んで、一九一／二ページに、（戸坂が下獄（同年九月に長野刑務所へ）の一〇日

ほど前に千葉は一宮町の自分の家を訪れて自分と空間論について語るところがあつた」と書いてあるのを見つけ、興味ぶかくまた感慨ぶかく受けとめました。今回はじめて気がついた貴重な証言です。他日、機会が得られれば、どこかで紹介しましょう。

その戸坂は、下獄した長野刑務所において、疑いもなく自分でもそこまではと予想してはいなかったにちがいない極端に非人間的な劣悪な非衛生居住条件を備えた独房に（たぶん意図的にしたろう）放り込まれ放置された結果、ひどい疥癬にかかり、ついに一九四五年八月九日、敗戦のわずか六日まえに、酷熱のなか死ななければなりませんでした。なんと腹立たしい痛ましいことでしょうか！

では、伊藤についてはどうであつたのか？ なるほどかれは、――まず間違ひなく後年のわたしたちのうちだれ一人まったくなにも知らないまま、――戦争を生きのびて、右に見られるとおり、一九四八年六月四日にはまだ生きていて、あの「あとがき」を書きました。自分の受難については、なにも語っていません。しかし、持病（肺患）の悪化のため「戦後間もなく死んだ」という認定もあります（8）。これが正しければ、あの「あとがき」がかれの絶筆となつた可能性さえ想定できるわけです。いつたい、いつまで生きたのでしょうか？ せめてその生没年くらいは正確に知りたいものです。

（8） 前掲『証言』三五ページおよび三三ページ。

というしだいで、著者・伊藤至郎については、その生没年をはじめ不明な点がまだまだ残つていて残念ですが、このへんで切り上げて、このあとは急いでその著書『伊能忠敬・鈴木雅之』とくにその前半「伊能忠敬」に立ち向かわなければなりません。

- 1 なぜこの本を書いたのか？ どんな本か？
- 2 いつこの本を書いたのか？
- 3 「伊能忠敬」はどのような作品か？

1

なによりもまず、この本が、時期も異なれば活動分野も異なっていた二人の男の話をいわば仲よくいっしょに並べて一冊にした、かなり風変わりなものだ、ということ、あらためて確認しましょう。

すなわち、忠敬先生が江戸時代後期に日本全図を完成させた卓越した測量家・地図製作者であった（二七四五—一八一八）のにたいして、鈴木雅之は、平田篤胤の流れを汲む国学者であり歌学者・歌人であった（一八三七—七一）ようです。この本がこういう二人をそれぞれ主役にするという独特なつくりになっているということ、じつはこれにはちゃんとしたわけがあり、ここにこそその最も基本的な特徴があるのです。わずかに四ページの「序」を読むと、著者がどのような動機に駆り立てられてこの本を書いたのか、よくわかります。なかほどにこうあります——

「忠敬は多く世に知られた。彼はまたたしかに知られるに値する人でもあった。下総の人達が彼「上総に生れたが養子として下総の人になった彼」ありしを誇るのもつともなことといふべきである。彼は下総が誇るに値する人物であった。そしてこの私も下総に生まれ、それ故に彼ありしを誇る一人である。しかし、鈴木雅之もまた下総の誇るに値する思想家であり国学者であった。下総がこの人を埋れたままでおくことは「恥辱」とはなるが決して褒められることではない。私はいま世にむかって下総に彼ありしを誇る。さうして彼が世に知られるの日が待たれてならない」（三ページ）、と。

忠敬先生と比べてずっと知名度の低いこの鈴木雅之については、少し前のほうにこう書いてもいます——

「鈴木雅之を語るにあたって私はここではただ彼が世に知られずに今に到ったことを遺憾に思ふところを以てしたといふ外はない。彼を世に知らせてやりたい、かう私は思ふ」（二ページ）、と。

著者のこの思い（9）は、切々とわたしの胸にも響いてきます。これほどにも強くかれが自分の故郷が生んだ世に知られずにいるこの逸材のために力を尽くそうと念じていたことに、わたしは、深く感動します。

（9）本書後半、一八七ページ以下あたりでも、あらためて吐露されています。

総じて、自分の故郷に生まれたこの二人のすぐれた先人たちのみごとな業績を顕彰することが、伊藤が本書を著した最大の動機であった、と言うことができるでしょう。その大もとにあったものは、自分が「貧しい農家の子」（前掲「あとがき」）として生まれ育った下総の地わけでも一宮町に寄せる、かれ自身の深い愛情であったにちがいありません。わたしは、かれが著書のあちこちで「一宮」としていることに、とくにたとえばあの「あとがき」の最後に「千葉県一宮町において著者」と書いていることに、それを感じとる者です。わたしに言わせれば、かれ伊藤至郎自身、いまでは一宮の人たちが誇るにたり顕彰するに値する篤実な思索者・学者です。本書は、そのような伊藤が心をこめて取りまとめて世に送り出した貴重な作品なのです。

2

伊藤至郎は、では、いつ本書を書いたのでしょうか？

以下、このことについていくらか考察めいたものを展開してみますが、もうここでいち早くその結論を述べてしまいいましよう。「伊能忠敬」・「鈴木雅之」の両篇とも、一九三八年十一月二十九日早朝の検挙まえにはほぼ完全に書きあげられていた、と見られる、というのがそれです。

まず、「拘禁中」——検挙されてから予審終結の決定→保釈にいたるまでの期間——には、勉強も執筆もできなかったにちがいない、それをとにかくも再開できるようになったのは、一宮町の自宅にもどつてからのことであつたはずだ、というのが、わたしの推論の前提です。

さしあたり、かれが「序」を書いた一九四一年九月一日のあたりにはどうのような生活をしていたのか、想像してみましよう。保釈後ほぼ四か月たつていて、まだ公判廷がよいに追われていた（すでに公判は開始されていた、と想定して）のか、それとも、公判も終わって唯研の仲間たちと同じく静かに判決の日を待っている状況であつたのか、わかりませんが、いずれにしても、少なくとも、この短日月のあいだに、本書全体（あるいは、ただ前半だけ、ないし、ただ後半だけでも）のような、それなりに大量の原稿を書きあげることが、常識的に判断して、不可能であつたでしょう。かれにやれたのは、すでに基本的にはできあがつていた原稿を読みなおし、それに手を加えて完成度を高め、最後に「序」を書いて上梓に備える、という、ただその程度の作業だけではなかつたでしょうか？

すこしテキストについて見てみましょう。

前半「伊能忠敬」の本文の最後には「昭和一六〔一九四一〕・六・二七夜」として記されていて、右に示唆したような手入れ（仕上げ）の

作業がこの晩に完了したことを認定させてくれますが、もちろん、手入れの対象であるその原稿のいちおうの完成がいつのことであつたかについては、なにも推定させてくれません。

ところが、後半「鈴木雅之」では、本文がすでに「昭和十一〔一九三六〕年十一月」に書きあげられていたことが、その末尾（二七九ページ）に明記されています。他方、二七九ページから二九一ページまでに及ぶ鈴木木の「著述目録」が「昭和十六〔一九四一〕年六月三十日」に、さらに「鈴木雅之年譜」が「二九二―二九六ページ」が同年「七月二十一日」に、それぞれ書きあげられて、本文に付け加えられていまし、本文は検挙まえに完成、あとは予審終結決定後のあの時期・それも九月一日まえの日に執筆、というのが、はっきりわかります。

わたしは、「伊能忠敬」の本文も、——明示されてこそいませんが、——やはり検挙まえにはほぼ書きあげられていたのではないかと推定するのです。それは、さきほど確認した物理的・時間的条件から言つてその時期をやはり数年まえへさかのぼらせないわけにはいくまい、と考えるほかに、もう一つ、いわば「内的論拠」とでも言いたいものがあるからです。それは、下総出身のこの兩人を顕彰したいという、かれのあの熱意です。かれは、この情熱に駆られて、検挙まえの一時期（たとえば、一九三七年ごろ？）に、「鈴木雅之」に続けて、集中的また継続的に「伊能忠敬」の著述にたずさわつたのではないのでしょうか？ こうして、上掲の結論を出してよい、と考えたしだいですが、批判ください。（原稿が検挙のさいに押収されずにすんだのか、あるいは、押収はされたがあとで保釈かなにかのさいに返却されたのか、など、そのへんのところは、まったく不明です。）

（続く）

（あきまみのる・東京都立大学名誉教授、哲学・自然科学思想史）

高田野尻商人網代状の写

(筆者家所蔵)

久しくおのく さしきたり候、
あちともの事むかひこふ百姓
わひ事申について、めしはな
され候、其のため御印判を以、
あひさため被申候ところ実正也、仍旨趣如件

元龜四年葵酉 八月十四日

(一五七三年)

たか田 の志り

役人衆奉之
商人衆各中へ

宮内清右衛門三川田状

(濱宅宮内家所蔵)

さん川にてかへ申田地之事、
五段くたされをく所也、仍し
をかま之事へ、上申へき分申
之上、其意にあひまかせら
るゝ者也、仍如件

壬申 (鶴丸黒印影)

役人衆奉之

壬正月三日 (一五七二年)

宮内清右衛門尉

追而、御船之事こしらへ申候由之間、当年者五百文
ゆるされ、七貫五百文おさめさせられへき也、以上

額賀幹勝より藤枝弥三郎船状の写 (筆者家所蔵)

藤枝弥三郎船之事、額賀長門守

判口船二而候、当領衆之事者勿論、



利根水運を支えた高瀬船

錦絵 富嶽三十六景 常州牛堀

千葉県立大利根博物館蔵

(宮本茶村による額賀幹勝について
の考証)

藤枝弥三郎殿 幹勝 (花押)

霜月十日 額賀長門守



な役割を果たした。しかし、その後、昭和の初期にその姿を消した。
い、昭和の初期にその姿を消した。

高瀬船は利根の水運を支え、江戸時
代には潮来・佐原・銚子の発展に大

き役割を果たした。しかし、その後、昭和の初期にその姿を消した。
い、昭和の初期にその姿を消した。

(大利根博物館説明文より抜粋)

ら房総沖をへて江戸へ入る東回り航路を開発した。その後、最上川を下り酒田から海路下関・大坂・下田を経て江戸へ入る西回り航路も開発した。

注⑤ 潮来ルート 海路運ばれてきた物資は茨城県那珂湊に入り、河川や湖沼など一部陸路を経て潮来に集積され、川舟に積み替えられて利根川に入るコース。

注⑥ 水戸藩御用金（元禄十三年）御用金三〇〇両以上

順	住所	氏名	金額
一	潮来	宮本平衛門	三〇〇両
二	潮来	窪谷庄兵衛	一三〇〇両
三	湊	忠三郎	七五〇両
四	潮来	助衛門	五〇〇両
五	潮来	山三郎	五〇〇両
六	湊	市衛門	五〇〇両
七	小泉	内蔵之充	四一五両
八	水戸	作十郎	三〇〇両
九	部垂	与兵衛	三〇〇両
十	嶋河岸	山九郎	三〇〇両

『水戸市史』中二巻より

「あとがき」から

・・・・本稿を締めくくるにあたって次の二点について記したい。

第一に「忠敬はどうして偉業をなしたか」ということである。

三治郎時代の忠敬は不遇に書かれてきたが果たしてそうであったろうか。幼少にして母を亡くし、小関家に残されるが、神保家に戻っ

てからは、縁戚に当たる平山季忠の我が子以上とも思えるバックアップを得て、恵まれた環境で育ったと見るべきであろう。

平山季忠は、幕府学問所の昌平黌に学んでおり江戸の学者等の人脈があり、医学者や本草学者の平賀源内などとも面識があった。また、地方の名主ネットワークもあった。それらは忠敬が大きく育つに役も二役も果たしたに違いない。学僧から数学を学んだことも、医学を志すに至る過程においても、また、土浦に出て医学を学ぶことができたのも、平山季忠の助力なくしては不可能である。

これらは、当時の一般庶民にできるはずもなく恵まれた環境であった証拠である。

伊能家婿入りに際しては、自分の養子とし、林鳳谷の命名であるが季忠の「忠」の一字まで与えている。大変な力の入れようである。

少年三治郎（忠敬の幼名。婿入り前は佐忠太と名乗っていた）には平山季忠をしてほっておかせない何か（向学心・野心・青雲の志・大業成就の願望）魅力があったのではないだろうか。

当時、小関家のあった九十九里町は干鰯（ほしか）で賑わっていた。取引も活発で実学の算盤等の他、和算も庶民の間に広まっていた学ぶ者も多かったようだ。和算は実学というより道楽に近いものとされている。地域経済的に余裕があり文化的にも発展していた証拠といえる。忠敬はそのような地域環境の中に生まれたのである。

養家伊能三郎右衛門家は永沢治郎衛門と並んで、佐原で両家と呼ばれる名家であった。それは単に名主という理由だけでなく飢饉に際しては窮民救済に尽力したからにほかならない。

佐原一帯は時々利根川の氾濫による被害にあっていた。村方は復旧に全力を尽くすと共に村民の納得の行く形で荒れた田畑を再配分しな

ければならない。それには測量技術は勿論、文書により記録に残すことが重要であった。達の祖父景利は村方に任中に多くの記録を残していた。忠敬は測量技術のみならず、それら伊能家の貴重な資料に助けられ仕事できた。記録の重要性についても学んだに違いない。測量日誌にも見られるメモ魔ともいえる程のまめさは景利から学んだものであろう。

忠敬は三郎右衛門時代に地域佐原から極めて多くのことを学んだといえるのである。

三郎右衛門家と茂左衛門家は小野川を挟んで対していた。その伊能茂左衛門家七代当主伊能魚彦は長男に家督を譲り三十七才で賀茂真淵に弟子入りし、四天王といわれる高弟となった。二十三才年下の忠敬にとって、手本となったであろうことは十分に推測できる。

伊能家を再興させた忠敬は長男景敬に家督を譲り隠居して、念願の学問により身を立てることを実行に移すだけの財力など余裕を身につけた。

当時、忠敬の地元佐原は利根川の水運を介して潮来・銚子・江戸も含めて同一の文化圏であり、経済圏であったと云えないだろうか。その圏内の情報と財力をいかして、江戸に出たのであろう。

忠敬の幸運はその情報網から、高橋至時という良き師にめぐり会えたことにある。改暦事業のため麻田剛立一門から送りこまれた至時との運命的な出会いこそ、偉業達成のまさに偶然のなせる業である。

時代背景として、ロシアの南下や林子平の海防論などから北境の警備の急務を悟った幕府は蝦夷地の巡視警戒をさせた。そのような状況下、正確な地形図が必要になっていた。

徳川吉宗による禁書の緩和（一七二〇年）で学術書が輸入され西欧

の学術・技術が入ってくるという時代的幸運も見逃せない。（富吉繁貴氏指摘）

前述のように偉業達成の要因は、生家の地域環境・養父平山季忠・養家伊能家・佐原の地域社会・先輩伊能魚彦・水運で結ばれた文化経済圏から得た情報・良師との出会い・ロシアの南下による国難などの外的要因などが挙げられる。しかし、それらの要因を一身に集めて幸運児になれたのは忠敬の資質によるものであろう。

それにしても六十を過ぎてからの測量は忠敬にとって大変厳しいものであったに違いない。忠敬には持病があり必ずしも健康体とはいえない。一病息災とし健康管理を徹底し、長期の測量に耐えられる体と心を維持している。普通に言う責任感・使命感、ましてや俗に云う功名心などで出来ることではない。私には執念とも思える使命感であり行動力のようにみえる。それらは測量を通して忠敬自身の中で、天命と言わせるほどに昇華したのではないだろうか。実に、しつぱうりゅう 嶺風沐雨十七年、距離にして地球を一周、歩数にして五千万歩（歩幅六十九センチ）、測量日誌五十一冊である。

忠敬はなぜ天文・測量という分野を選んだのであろうか。

一、幼少より数理に関心があったのみならず、平山季忠の影響もあり学問により身を立てたいという熱い願望が少年時代に育っていた。

二、三郎右衛門時代に測量や天文について独学であったが既にかなりの実力を身につけていた。

三、士農工商の身分社会において、医学や、天文などは他の学問分野に比して、実力が正當に評価されるとの判断があったのではないだろうか。日食や月食の計算は、はっきりした形で結果が出てくる。門地

や身分の違いがあっても先端技術の分野では重く登用せざるを得ない。麻田剛立は関西の庶民学者であつたが幕府はその実力を認めざるを得なかつたのである。

第二に忠敬周辺に見られる人脈について

それは暦学や天文・工学・蘭学・医学に止まらない。思想や政治とも絡み合い複雑で混沌としているが、忠敬周辺の人脈から明治に繋がる大変革の兆しを読み取ることができるのである。ここでは人物名と関連事項のみ列記し人脈を考察してみたい。

忠敬の命名者である林鳳谷の林家の人物関連を見てみると鳳谷は初代林信勝（羅山）から五代目にあたる。九代の林衡（述斎）は松平定信の寛政の改革に際会し、昌平坂学問所の開設（昌平黌を公的学校とした）に尽力して学頭となり林家中興の主といわれる。洋学弾圧で知られる鳥居耀造は述斎の三男である。述斎の弟子に佐藤一斎がいる。一斎は林述斎と共に多くの門下生の指導にあたつた。また、昌平黌の儒官となり日米和親条約に際して林復斎（述斎の子）を助け外交文書作成に尽力した。幕末から明治にかけて大きな影響を与えた人物である。佐藤一斎の弟子に、山田方谷、渡辺崋山、佐久間象山らがいる。伊能家との関連で見ると上野源空寺伊能忠敬墓石側面の碑文も一斎によるものである。また、忠敬の嫡孫忠誨の師でもある。一斎の弟子で田原藩の渡辺崋山は江戸詰年寄の末席となり海防を担当した。また、シーボルト門下でもあり、高野長英ら蘭学者と交わり「蛮社の獄」に連座し自刃した。

一斎の弟子で松代藩の佐久間象山は幕末の思想家であるが弟子に吉田松陰、橋本左内らがあり、吉田松陰は高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤博文、山県有朋ら明治につながる多くの門下生を輩出している。

暦・天文・蘭学・通詞・医学の人物関連をみるなら麻田剛立、その弟子に間重富、高橋至時（忠敬の師）、片山蟠桃等がいる。間重富の弟子に久米栄左衛門、至時の長男高橋景保、次男洪川（高橋）景祐、足立左内（信頭）、景祐の長男洪川六藏等々、通詞、馬場左十郎、大槻玄沢等がいる。忠敬の嫡孫忠誨は足立佐内について研鑽している。大槻玄沢は杉田玄白と前野良沢の弟子で仙台藩医である。忠敬後妻信の父桑原隆朝も仙台藩医であり何らかの關係があつたのではないか（富吉繁貴氏指摘）。伊予宇和島藩は伊達氏であり洋学に熱心である。工業技術の面では大野弥五郎、弥三郎、規周等、明治につながる技術の伝承がある。

忠敬の弟子に、間宮林蔵、榎本武揚の父箱田良助がいる。榎本武揚は函館戦争に敗れたが、彼の才能を惜しむ黒田清隆らの助命運動により釈放され、その後明治新政府で活躍、ロシア全權大使、清国大使、通信、農商、文部、外務の各大臣を歴任し、子爵にまでなっている。江戸の儒学者山本北山の弟子には大窪天民、宮本茶村、梁川星巖（勤皇の詩人）がいる。忠敬の内妻とされる（客分）大崎栄も山本北山の弟子であつた。

水戸学及び佐原・潮来周辺地域の人物関連をみると、水戸藩主徳川斉昭、水戸藩の藤田幽谷、会沢正志斎、藤田東湖ら尊王攘夷思想、郷土の学者、久保木清淵、宮本茶村等がいる。水戸学は吉田松陰らに大きな影響を与えたと考えられている。



梁川星巖筆 山本北山の門下、宮本茶村の詩友、安政の大獄に連座するも逮捕3日前に病死（筆者家所蔵）

吉田松蔭は宮本茶村宅に宿泊している。茶村の獄中生活が松蔭の獄中生活に影響を与えなかっただろうか。

忠敬の時代以降の幕府天文方は最先端の知識人・技術人・科学者を集めたアカデミック集団であった。そのような環境下で忠敬は偉業を達成することができた。そして、その人脈は日本の近代化に大いに力を貸すことになったのである。

忠敬は三人の妻に先立たれ、晩年、信頼篤い坂部を亡くし、長男景敬にも先立たれる等、必ずしも幸運とは云えない面もあるが、自ら信ずることをやり遂げ、後年、絶大な信頼を寄せていた長女妙薫に嫡孫忠誨の後見をさせて、後に起こるシーボルト事件や忠誨の早世を知らずに他界した。そして、現在、全国各地にファンを抱えている。稀にみる幸せ者に違いない。

(終)

(みやうち さとし・伊能家縁戚、濱宅宮内家17代当主)



濱宅宮内家所蔵資料から (その三)

宮内敏氏提供

宮内家所蔵資料は古文書の類、村役関連資料(水帳、地引帳、宗門五人組、割付取調書、諸役割付石高帳、村地図、地租改定に伴う資料、県提出資料など)に、家業関連資料(廻船、漁業、酒造、金融に関する資料、裁判記録、広告の版木、当家の商標入りの高瀬舟の盃など)、書画、書簡の類、骨董品(矢立、根付、火薬入れ、財布、刀、古銭など)、伊達家拝領品(膳、杯)、目録などです。このたび川名先生(千葉経済大学名誉教授・利根水運の第一人者)のもとで古文書目録が完

成しました。書画、骨董、書簡は含まれませんので三百点くらいです。

村役関連資料と家業関連資料の一部



〔下総国海上郡三崎村今宮村辺田村隔地相論の事〕資料

主德園海上約三嶋村と云村是園村所地相藩
しし紀ゆへ給由之面所境要筋をいふ言より古く
之者押下村三方に意知く衆要筋を南方三嶋村
地よりくも通西し又其衆根が二嶋先寺村中流を之入
今、白河川の先親要筋を北方三嶋と云入居を
と道西しと文根又塘要筋を西方三嶋と云島之
入組東方三嶋村をいふ論を入しと、地所登新林之
成之三島をいふ相与くも遠方仍わ新海

寬文五年乙巳八月十日宴喜在

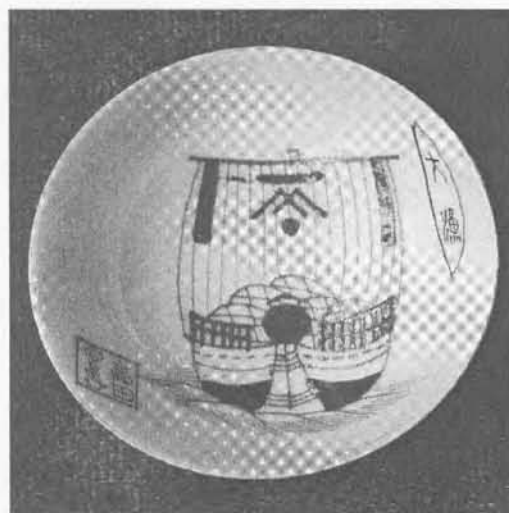
卷之六

渡大隅

村長

柳甲斐

井河内



寛文五年（一六六五）八月十四日

妻彦右 印（勘定奉行 妻木彦右衛門頼熊）

寛文二年四月十二日、寛文十年十二月三日

岡豊前 印（勘定奉行 岡田豊前守）

渡大隅 印（南町奉行所 渡辺大隅守綱貞）

寛文一年四月十二日、寛文十三年一月二三日

村長門 印（北町奉行所 村越長門守吉勝）

萬治二年（一六五九）二月九日〜寛文七年十二月一六日

賀甲斐 印（寺社奉行 加々瓜直澄甲斐守）

寛文一年十一月十一日、寛文十年十二月十一日

井河内
(寺社奉行 井上河内守)

和算の人脈 (二)

安藤 由紀子

一 『算法少女』をめぐって

伊能忠敬から現在まで続く、和算の人脈についてまとめてみた。

きっかけ

昨年夏、「ちくま学芸文庫」から遠藤寛子著『算法少女』という本が出版されて、一年経った今もロングセラーを続けている。「伊能忠敬文書目録」を作るとき和算関係の文書で苦勞した私は、早速この本を買って読んだ。

少年少女向けにやさしく書かれた小説で、史実に基いたフィクションである。著者の「あとがき」によれば、昭和四八（一九七三）年初版のち、数学史・和算関係の多くの研究者が復刊のために力を尽くし、三三年ぶりに文庫として日の目を見たということである。

さらに話は一年前に遡るが、目録の和算関係の文書の摘記に困って、ネットで「和算」と入れて検索し、「和算の館」^{注1}というホームページを見つけた。数学史学会の小寺裕先生のHPで、質問はなんでも受け付けてくださるような雰囲気だったので、とうとう和算関係の文書のコピーをお送りし、内容摘記を丸投げしてお願いしてしまった。

前記、遠藤さんの「あとがき」を読んで、小寺先生がこの本を「復刊ドットコム」に登録され、多くの票を集めることができて、筑摩書房が出版に踏み切ったのだということを知った。

また今年初め、安永四（一七七五）年出版の「算法少女」原本のコ

ピーを先生から送っていただき、「和算とはこういうものか！忠敬もこういうものを勉強したのか！」と、分からぬながら感心してしまった。楽しい問題がたくさんある。



和算の問題をいくつかを、この稿の最後に連載するので、数の道に
くわしい方は解答に挑戦してみてください。

二千葉あき〔宝暦一三（一七六三）年？〕

町医者の娘

さて、この小説の主人公千葉あきの没年は分からないが、安永四年に江戸で『算法少女』という名の本を上梓したとき一三歳であつたというから、宝暦一三（一七六三）年の生まれ、忠敬より一八歳年下である。

彼の長女、妙薫と同じ歳であるから、娘の年代にあたる。本が上梓された年、忠敬は三一歳。かねて係争中の「佐原村河岸問屋一件」を村政担当者として立派に切り抜け、妻同伴の奥州旅行を計画中であった。

あきの父は千葉桃三といい、神田銀町に住む町医者で、もとは大坂の人である。算法に熱中して、大坂にいるころは天満宮（てんまのてんじんさん）などに、所せましと掲げられた算額を解くことのできる数少ない和算家であつたらしい。

あらずし

この父から算法の手ほどきを受けた一人娘のあきは、浅草の観音様に奉納された算額の誤りを指摘したことから、自身高名な和算家であつた久留米藩主有馬頼僅の目に留まり、姫さまの算法指南役に召しだされることになったが・・・というのが話の発端で、この一件は在野の上方算法を追い落とそうとする関流（関孝和を流祖とする）の藤田貞資から邪魔がはいって実現しない。やがてこの一三歳の少女は『算法少女』という本を出版してのち、九九も知らない子供たちに算法を教えてゆこうとする・・・というのが、この小説の「あらずし」である。

鈴木彦助

ところが、最初に主な登場人物の紹介がついていて、その中に見たことのある名前―鈴木彦助―を発見した。この人物の説明は、こうなっている。「山形出身の算法家。のちに、会田安明として有名になる。あきに好意をもっている。」と。

記憶に残っているはずで、忠敬の友人会田算左衛門安明こそ、この人なのである。

公儀直参で普請方、利根川改修の仕事を担当していた鈴木彦助は、「東北なまりのつよい、ひどく四角張った」物言いをする若い侍（といつても、この年二十九歳）として登場する。「お女中」などと呼びかけて、「変なお侍さんだ」とあきに思われてしまう人だ。

隆盛だった関流を目の敵にしていたから、仕事の合間に彼女を応援してくれる役である。

和算も日本お得意の流派システムで、家元から免状を貰う仕組みである。問題と答だけを出して、途中の解法は各派の秘中の秘であつた。互いに競い合い憎みあつていた。

当時関流が圧倒的に優勢で、久留米藩主有馬頼僅も、関流の藤田貞資を召抱えていたから、反逆児鈴木彦助（会田安明）はあきを熱心に応援したというわけである。

三 会田算左衛門安明

〔延享四（一七四七）年―文化十四（一八一七）年〕

会田安明と伊能忠敬

会田算左衛門安明は、こののち関流に対抗して「最上流」を旗揚げし、関流の後継者たちとの間で二〇余年にわたって論争を続け、六〇〇巻にのぼる膨大な著作を残した。彼は伊能忠敬より二歳年少で一年前に没した同時代人であるばかりでなく、忠敬の人生の抜き差しならない関係者の一人であつた。

「伊能忠敬文書目録」を作る過程で、忠敬と安明の関係を示す新しい資料が複数発見された。いずれも、忠敬の唯一の後継者、内弟子渡辺慎（尾形啓次郎）をめぐる事実である。



新しいいくつかの資料が示す結論を先に述べてしまおう。

第一に、内弟子尾形啓次郎の実の父親は、この会田安明である。

第二に、尾形の実の母親は、忠敬の無二のパートナー大川治兵衛の娘（または妹）である。

第三に、忠敬は、内弟子の尾形を実子同様、あるいはそれ以上に可愛がっていた。

第四に、安明は、伊能忠敬の和算の先生であった可能性が高い。右の四点である。

この四人をつなぐ糸をたどってゆくと、江戸時代ならではの人間関係と、現代にも通じうるドラマを見ることが出来る。

会田安明の家族

会田算左衛門安明とは、いったいどんな人だったのであろうか。

以下は、伝記「会田算左衛門安明」（昭和四一年刊、平山諦・松岡元久編）による。

安明の父会田重兵衛は、山形県南村山郡堀込村の内海与平治の長男であったが、農業をきらい妻と共に山形（山形藩、秋元氏・六万石）に出て、絶家になっていた会田家（商家カ）に買養子に入った。そして、二子、安明と妹が生れた。生誕地は今の山形市役所の南、大沼デパートのあたりという。

因みに、父重兵衛の実家内海家のご子孫は、現存しておられる。一昨年目録へ右の写真を転載したいと思い、吉川弘文館に連絡したところ、画像の所蔵者である山形市前明石の内海与平治という方に、許可願を出すように求められた。封書は宛名人不明で戻ってきてしまったが、同じ世襲名を、現在も名乗っておられるのだから、この家はかな

りの豪農だったと思われる。

長男が町へ出てしまったので、実家では重兵衛の弟が内海の家を継いだ。やがて安明の妹は、その内海家の嫡男（従弟に当る）に嫁して農業を継ぐことになった。

事情はよく分からないが、父重兵衛の死後、安明は母とともに、妹が嫁していた本家内海家の厄介になったという。

養子先は旗本か

さて安明は、「二三歳の時、志を立てて江戸に出て、鈴木清左衛門という旗本の株を買って養子となり、鈴木彦助と名乗って御普請方の仕事を継いだ」と伝記はいう。株を買う資金は内海家が出し、金三分を貰って江戸に出発したらしい。

まず「旗本の株を買う」というぐだりに不審をいだいた。たしかに御家人株は、よく売買された。御家人株の売買は幕府公認で、人材発掘のために実に有効に機能した。幕府を支えた有能な御家人の養子は枚挙に暇がない。しかし内海家がいかに豪農だったとはいえ、御家人でなく、いきなり旗本株を買ったというのは本当だろうか？

『江戸幕府旗本人名事典』（原書房）によると、清左衛門という世襲名を持つ鈴木家が、確かに一家だけあった。

当主は、鈴木康元、通称を清左衛門といった。本国は三河、禄高三〇〇石で、うち蔵米一〇〇俵（石Ⅱ俵）だから、二〇〇石分の小さな知行地を摂津国に持っていた。家禄は少ないが、「三河以来」の名家である。先祖は家康に従った武士だったのであろう。屋敷は、市谷浄瑠璃坂（安明は出府後、別の場所、本所石原町に住まわされている）にあった。墓は谷中臨江寺、役職は番方（武官）筋となっている。確かに下層の旗本だが、会田安明が養子となったとされる明和六年に、当主は四一歳で、継嗣の泰直もいる。この家が養子先であるとは、考え

にくいと思った。

小川恭一著『江戸の旗本事典』によれば、「旗本」は本来軍事用語で、合戦の陣立てに「旗本備」があり、主君の旗印の下にいる親衛隊のことである。だから禄が少なくても、御家人とは格がちがうのである。勝海舟の家は家禄五〇俵だか、れっきとした旗本であり、父の小吉は夜店で刀を商つていても「殿さま」であつた。

旗本株の売買は、公式には禁止である。もし庶民や陪臣が旗本を偽称すると重大な犯罪になる。有能な技能者を求めて養子にし、死罪・流罪・絶家になる例もあつた。バレずに済む場合もあつたが、命がけの危険があつたという。

「奥州なまり」の旗本、ということ自体ありえないのである。

これらの辻褄の合わない事実を、どう結びつけたらいいのだろうか。想像するに幕府は専門家集団としての土木技術者がどうしても必要であつたから、その職禄はかなり高く、無役の下級旗本であつた鈴木家は、稼ぎのよい技術者になりうる安明を、「部屋住みの養子」としたのではなからうか。

前記伝記の中に、『自在物談』という安明の自伝が載せられているが、「養子にして一金もなし。金銀のことは、皆養父の心に任せ置く」と書かれているから、ある割合で収入を分け合つたのであろう。

幕末には、「部屋住みの養子」が当主や嫡男を飛び越えて職を得ることは、特に技能職で、よくあつたさうである。岩瀬忠震・小栗忠順・永井尚志などがその例である。安明の自伝によれば、彼が利根川普請の現場監督をしていたとき、百姓たちは彼を「旦那」と呼んでいるから、御家人として認識していたことになる。庶民はこういうことにたいへん敏感で、旗本なら「殿さま・奥さま」、御家人なら「旦那さま・新造さま」と呼ぶのを間違えることはなかった。

これも想像だが、安明は山形時代にすでに高度な和算の力を持ち、有能な土木技術者として売り込めたのではないだろうか。いずれかのツテにより、鈴木家は彼を獲得したのであろう。

科学技術から身分制度がくずれるという現象は確実に進行していた。間重富や伊能忠敬の登用もその例にもれないが、幕府の人材登用は、会田安明のような形でも、非公式に機能していたと思われる。

一つの事例として、たいへん面白いと思う。

後の天明六（一七八六）年、將軍家治から家斉への代替わりがあつて、これは、老中田沼意次から松平定信へ、積極財政から緊縮財政への代替わりでもあつて、多くの幕臣のリストラが行なわれた。彼もその例にもれず、解雇されてしまう。無役になったとき姓を会田に戻し（鈴木家の方で、用済みになった彼を離縁したのかもしれない）、会田算左衛門安明と名乗るようになった。

長年一日も怠りなく勤め、儉約を守つたので、貯えもあり、算法に専心することが出来た。この失職は、「天の賜物」であつたと「自伝」は述べている。

シビルエンジニアとしての和算家

以下は、東北大学の米沢誠氏の論文『シビルエンジニアとしての和算家』による。

和算家たちは、江戸期を通じて測量や土木などのシビルエンジニアリングの分野に、多面的に係わつてきた。

寛永のころ成立の和算の名著、吉田光由の『塵劫記』^{ジンコウキ}には、検地・面積・計算、治水・掘割・容積・計算、測量は幾何学・計算の応用問題として、多くの設問とその解法が記載されている。

国絵図の作成

その後和算家たちは、幕府が国家的事業として押し進めた数次にわたる国絵図作成事業の中で、大きな役割を果たすことになった。各藩もこの命を受けて、競って測量に秀でた人材を登用した。測量技術の専門集団がいて、幕府及び藩の事業には、それらの人材が不可欠であった。

享保年間に將軍吉宗は、元禄の日本総図の改訂を行ったが、その責任を負ったのも、関孝和の高弟建部賢弘であった。「享保日本図」は、精度の高いものと評価されている。伊能忠敬の登場以前に、こうした厚い積み重ねがあつたのである。

治水・利水の工事

『塵劫記』の中の「河普請のこと」という題の治水の問題には、堤の盛り土の量の算法、川水をせき止めるとき使う蛇籠（石詰め籠）の容積の算法、三角柱枠の容積の算法などが載っていて、当時の治水技術の一端を知ることができる。



『塵劫記』寛永4年(1627)

河普請のこと

蛇籠(石詰め籠)と三角柱枠

享保の頃幕府は、將軍吉宗の出身地で行なわれていた「紀州流」治水術を採用することにし、専門家集団「普請役」を設置した。初めは関東一帯、のちに全国に点在する天領の治水工事を担当させ、人員は一〇〇名を超えたといわれる。

会田算左衛門安明もこうした普請役の一人であつたし、のちに登場する彼の実子渡辺慎(尾形啓次郎)も測量ばかりでなく、普請役として宇治橋の改築も手がけた。安明との長い論争の相手だった関流の神谷定令も、幕府の普請方であつた。神谷と同門の石黒信由は加賀藩で重用され、検地・治水・開墾のほか、加賀、越中、能登三州の測量と地図作成に貢献した。因みに石黒は、享和三(一八〇三)年八月三日、北陸測量中の忠敬を訪ねて天測を見学し、翌日は測量に同行している。(河崎倫代『加賀藩天文学者西村太冲』『伊能忠敬研究』第二九号) 和算家の果たした大きな役割がうかがえる。

四 利根川と会田安明

利根川

利根川は「坂東太郎」といわれた暴れ川で、家康入府の頃は今より一回り小さく江戸湾に流れ込んでいた。しかも乱流をきわめ、どれが幹流でどれが支流か分からない状態であつた。洪水のたびに、流路が変わつた。

現在の主な支流渡良瀬川は利根川からは独立した水系で、並行するように南流して、やはり江戸湾に注いでいた。鬼怒川も別の水系で、小貝川を合わせて、鹿島灘へと流れていた。

「利根川東遷(流路変更)」が行なわれて、利根川が鹿島灘へ流入するようになったのは事実であるが、その時期や意図については諸説あるらしい。治水・利水・通舟を意図したことだけは確かであろう。

前記安明の『自伝』は、当時の河川工事の具体的史料として貴重なものと思われる。安明が現場監督として活躍した様子が生き生きと描かれている。

彼は暗記力抜群で、「飛鳥も及ぶべからざる程の早算」であった。仕事の手際もよく、人夫の扱い方も巧みであった。川のしめ切り方、堰や樋の容積の見積もり方、村々への農用水の配り方、村民間の水争いの仲裁などに大活躍したらしい。

安明の仕事の範囲は、渡良瀬川、鬼怒川、小貝川、見沼井筋、印旛沼、手賀沼と利根川水系の広い範囲にわたっている。

水配り

水配りの話は、自伝中の圧巻といっている。彼は「最初に関東中の地理を考へ、川々の水源水尾を知り、次に用水井筋の模様を考へ、村々の料地の高低迄も常に心掛けて」いたので、渇水だと言って駆け廻ることもなく、「算術を楽しみてくらせし也」という。

川上の村々で用水の盗み取りのあるときは、川下の村々の百姓に竹やりを持たせ、水盗人を見つけたら突き殺すよう申渡し、その旨川上へ触れを廻して無事水の引渡しをすませたこともあると述懐している。

川瀬閉め切り

川瀬閉め切り工事の様子も活写されていて、映像にしてみたいと思わせる筆力である。先ず千人余の人夫の頭に役割ごとに浅黄や赤の色違いの目印を付けさせる。山萱と竹で壁を作り、即座にそこへ土を投げ入れるというやり方で、瀬の両側から少しずつ堤を築いてゆく。

土の運び方にマニュアルがあつて、ぼんやりして列をみだすと、高い場所に建てた丸太に縛り付けられる。帰りの行列は、これを見て囃し立て、本人は手ぬぐいで顔をかくす。命がけだが、すっかりみんな

な盛り上がるのである。最後に閉め切る瞬間、堤の内と外では『水丈け二丈ほどの差あり、大滝の流れ落ちる勢ひ』であるそうだ。この中に落ちて、年番名主が水死したこともあるらしい。

閉め切りが成就すると、人々は主だったものを一斉に胴上げして、酒を飲んで祝うのである。

そのときの指揮者安明のいであちはといえば、大将の目印に更紗の頭巾をかぶり、蝦夷錦の野羽織を着て、銀拵えの大小をさし、竹杖を突くというもの。後年の論争好きな算術家の面目躍如たるものがある。

岡堰の工事

小貝川の三大堰の一つ岡堰は、関東郡代伊奈半十郎によって寛永八（一六三一）年に造られたもので、二万石の水田に小貝川の水を灌漑用水としておくる施設であつたが、毎年春に築き、土用あけにそれを切る定めになつていたという。

安明はここでも大活躍する。川瀬閉め切りの仕上げの日は、千人の人夫が未明から取り掛かり、四つ時（十時）ごろには完成する。村々の名主役人が残らず出て酒二、三升・玉子二、三十ずつ持参し「おどろ喜びて皆々帰る」のが「古法」であつたが、「重り堤」（詳細不明）を造らぬうちは安心できないので、一日の内に「重り堤」まで造らせ、「是則、古人のいわゆる勝て兜の緒をしめると云の法」を実行して「古法」を改良する。この時洪水で上流の堰が押し流されたとの早飛脚が届いたが、岡堰だけは無事にすんだ。必要な人夫の延べ人数を大いに減らし、「百姓共も大きに悦びし事」であつたという。

会田安明と間宮林蔵

安明が普請役を解雇される前後（安明四一歳、林蔵二二歳）、この同じ岡堰に間宮林蔵が姿を現す。林蔵が生れた

常陸国上平柳村は、この堰の西一キロほどのところにある。

林蔵は数理的天才だったとして、次のような伝承が残されている。あるとき岡の上で仲間の子供たちと遊んでいた林蔵は、普請役の幕吏が村役人と算盤で工事の計算をしているのを見て笑った。「吏曰、汝我ヲ笑ハバ、能ク之ヲ算セヨト。倫宗（林蔵）未ダ算術ヲ知ラズ、心計以テ答フ。吏、大イニ慙^はズ。是ヨリ奇童ノ名アリ」と『新編常陸国誌』にあるそうである。郷里には、林蔵が江戸へ出るきつかけをつくったのは、岡堰の工事を担当していたこの幕吏であり、帰りに連れて行つたのだという言い伝えがあるらしい。もしそうならこの普請役は、安明の後任者であつたことになる。

林蔵は安明より二九歳年下であるが、この事件が林蔵十一歳以前のことであつて、この幕吏が安明であつたら面白い。しかし安明も計算はすべて暗算だったから、林蔵に「慙^はズ」る人ではなかつただろう。

後、文化五（一八〇八）年の暮れ安明は、自派最上流の高弟であつた二本松藩士の渡辺治右衛門に、同年に行なわれた間宮林蔵の第一次カラフト探検のことを知らせる手紙を書いた。渡辺は翌年二月安明に「右間宮林蔵と申仁^{ひと}は、何役相勤め御座候哉。当地御通行の砌^{みぎり}にても御知るべ罷^{まかりな}成り度、存じ奉り候」と書き送つて、めぐり合いの機会を二年間も待ちわびていた。

そして文化七（一八一〇）年松前から帰府の途中に、林蔵の方からこの渡辺を訪問している。二本松で渡辺治右衛門が待っていることを蝦夷地へ知らせたのは、会田安明以外には考えられないから、安明と林蔵とは極めて密接な間柄であつた、とだけはいえそうである。

安明と佐原

天明三（一七八三）年七月、浅間山に大噴火が起つた。昼でも空を暗くした大量の降灰は、やがて利根川に流れ込んで

川床を上昇させ、大水害を引き起こした。三年後の天明六（一七八六）年、解雇される一年前、強氣一点張りの安明も閉口するような大洪水が水系全体を襲った。各地で堤防が決壊し、普請方は総出で対応に追われた。こうした広い範囲の御普請見分の時は、御勘定五人に夫々御普請方四、五人付き、五手に別れて見分を行なつた。その集合、連絡場所が佐原村であつたらしい。

次号は、会田安明が利根川水系の工事担当者として、伊能忠敬の脈の一人になつていった「いきさつ」から話を始めよう。

付録 和算の問題

『算法少女』——初心の手引草 十問の内——

第三

浪花にて一石四十八匁五分の米。江戸へ廻し。百俵^{四斗}にて。金五兩壹分銀十三匁一分式厘五毛の利を得たり。一石に拾匁七分五厘の運賃諸懸。又浪花の小判のあたひ銀六拾四匁。江戸は六十目なり。江戸にて売所の相場。金壹兩に何程と問。

（正解をお知りになりたい方は、研究会事務局まで。次回は忠敬自筆の米の問題を掲載します）

注1 和算に興味をお持ちの方は、小寺氏のホームページ『和算の館』をご覧ください。
<http://www.wasan.jp/index.html>

注2 『算額とは、神社や仏閣に奉納した数学の絵馬である。江戸時代中期、寛文年間の頃から始まった風習といわれ、現在全国に八二〇面の算額が現存しています。算額は、数学の問題が解けたことを神仏に感謝し、益々勉強に励むことを祈願して奉納されたと思われる。人の集まる神社仏閣を発表の場とし、難問や問題だけを書いて解答を付けないで奉納するものも現われ、その問題を見て解答を算額にしてまた奉納するといったことが行なわれました。算額奉納の習慣は世界に例を見ず・・・』

(下掲の算額とともに、右記HPより。この算額は文化五年に大坂天満宮に掲げられ、平成一〇年に復元されたもの)

参考文献

- * 『会田算左衛門安明』 平山諦・松岡元久編 富士短期大学出版部
- * 『算法少女』 遠藤寛子著 ちくま書房
- * 『江戸の旗本事典』 小川恭一著 講談社
- * 『江戸幕府旗本人名事典』 小川恭一編 原書房
- * 『シビルエンジニアとしての和算家』 米沢誠著 東北大学付属図書館報「木這子」[※] Vol 30
- * 『間宮林蔵』 洞富雄著 吉川弘文館
- * 『利根の変遷と水郷の人々』 鈴木久仁直著 尚書房

(あんど うきこ・「伊能忠敬文書目録」編者)



伊能忠敬測量隊が観測した星 (二)

佐久間 達夫

前号で、伊能忠敬測量隊が観測した紫微垣、太微垣、天市垣、それに二十八宿のなかの東方七宿の星(星座)について記したので、本号では、二十八宿のなかの北方七宿、西方七宿、南方七宿の星(星座)について記述してみたい。

忠敬は、前述したように恒星の観測にあたって『靈台儀象志』や『儀象考成』などを参考にして星を観測し、「北極高度測量記」や「恒星表」「恒星経緯表」などを作成した。

「資料五」は、忠敬の手沢本であった『靈台儀象志』の黄道経緯儀表であり、「資料六」は、恒星南北視高度(享和三年)、「資料七」恒星経緯表(寛政九年)で、忠敬が作成したものである。

資料五 黄道経緯儀表(降婁宮至鶉宮)

伊能忠敬記念館所蔵

○新製靈臺儀象志卷之十

治理曆法極而南懷仁算家著博

從九品頂戴天文生蕭肅盡禮

士李士文蔚同受

從九品頂戴天文生馮方慶

黄道儀表 降婁宮至鶉宮

黄道経緯儀表

黄道経緯儀表者以黄道経緯儀所測恒星之度分也今具表内之度分與康熙壬子歲諸星在天所列之度分胎合無庸追加分秒焉蓋恒星依黄道經度漸次東移其本行細微歷七十余年而行天一度其緯度古今相同而經度則大不同也今恒星表内所列諸星之次第皆以黄道經度為主經度少者正前多者在後悉依黄道宮度自西徂東而順列之庶便指序而推究焉假如求某節氣日何星隨太陽在本地平之東西南北則查表内某節氣日太陽躔某官度即本度同行得其所求之星名也因之而安定星球星圖等器即見普天之星於地平在何方位及離地平之上下遠近瞭如指掌焉

降婁宮	星名	經度	緯度	分	緯度	分	向等
天鉤二	大土	度二十一	分七十一	度四十九	分北	四	
天鉤一	大土	度五十四	分七十四	度	分北	四	
天淵四	土金	度五十七	分十四	度	分南	五	
天淵三	土金	度十七	分十三	度	分南	五	
天淵四	土二	度	分五十七	度五十分	分南	三	

○ 伊能測量隊が観測した星名(星座名)

二十八宿 ○ 北方七宿

- ・斗宿六星(射手座)
- 斗宿一 斗宿二 斗宿三 斗宿四 斗宿五 斗宿六
- ・建六星(射手座)
- 建一 建二 建三 建五 建六
- ・天狗二星(射手座)
- 天狗一 天狗二
- ・天桴四星(驚座)
- 天桴一 天桴四 天桴内増二
- ・右旗九星(驚座)
- 右旗三 右旗五 右旗八
- ・左旗九星(驚座・矢座)
- 左旗五 左旗西増二〇 左旗北増一〇
- ・織女三星(琴座)
- 織女一 織女二 織女三
- ・漸台四星(琴座)
- 漸台二 漸台三 漸台西増一
- ・女宿四星(水瓶座)
- 女宿一 女宿二
- ・瓠瓜五星(海豚座)
- 瓠瓜一 瓠瓜二 瓠瓜三 瓠瓜四
- ・天津九星(白鳥座)
- 天津一 天津二 天津三 天津四 天津五 天津六
- 天津七 天津八 天津九 天津東増三一 天津南増一六
- 天津北増一七

- ・奚仲四星(白鳥座)
- 奚仲一 奚仲二 奚仲三
- ・司非二星(小馬座)
- 司非一 司非二
- ・泣二星(水瓶座)
- 泣一 泣二
- ・危宿三星(水瓶座・ペガサス座)
- 危宿一 危宿二 危宿三 危宿内増七
- ・墳墓四星(水瓶座)
- 墳墓一 墳墓二 墳墓三 墳墓四
- ・蓋屋二星(水瓶座)
- 蓋屋一
- ・人四星(ペガサス座)
- 人星一 人星二 人星四
- ・白四星(白鳥座・ペガサス座)
- 白一 白二
- ・車府七星(蜥蜴座・白鳥座)
- 車府三 車府四 車府五 車府六 車府北増三
- ・造父五星(ケフェウス座)
- 造父一 造父二 造父五
- ・天鈎九星(ケフェウス座)
- 天鈎三 天鈎四 天鈎五 天鈎六 天鈎八 天鈎九 天鈎西増
- 天鈎北増
- ・室宿二星(ペガサス座)
- 室宿一 室宿二
- ・離宮六星(ペガサス座)
- 離宮一 離宮二 離宮四 離宮五
- ・騰蛇二十二星(蜥蜴座・白鳥座・ケフェウス座・アンドロメダ座・カシオペア座)

騰蛇一 騰蛇二 騰蛇四 騰蛇九 騰蛇一〇 騰蛇一五
騰蛇一九 騰蛇二〇 騰蛇二一 騰蛇二二

・雷電六星(ベガス座)

雷電一 雷電二 雷電六

・疊壁陣十二星(山羊座・水瓶座)

疊壁陣二 疊壁陣三 疊壁陣四 疊壁陣五 疊壁陣六 疊壁陣七

疊壁陣八

・羽林軍四十五星(南魚座・水瓶座)

羽林軍六 羽林軍八 羽林軍二六 羽林軍二八 羽林軍三一

羽林軍三二

・北落師門一星(南魚座)

北落師門

・壁宿二星(ベガス座・アンドロメダ座)

壁宿一 壁宿二

・天厩十星(アンドロメダ座・カシオペア座)

天厩一 天厩二 天厩三 天厩六

・霹靂五星(魚座)

霹靂二 霹靂三 霹靂四 霹靂五

・雲雨四星(魚座)

雲雨一 雲雨四

○西方七宿

・奎宿十六星(アンドロメダ座・魚座)

奎宿一 奎宿二 奎宿五 奎宿六 奎宿七 奎宿八 奎宿九

奎宿一〇 奎宿一三 奎宿一四

・王良五星(カシオペア座)

王良一 王良二 王良三 王良四

・策一星(カシオペア座)

・閣道六星(カシオペア座)

閣道一 閣道二 閣道三 閣道四

・外屏七星(魚座)

外屏七

・婁宿三星(牡羊座)

婁宿一 婁宿二 婁宿三

・天大將軍十一星(アンドロメダ座)

天大將軍一 天大將軍二 天大將軍三 天大將軍四 天大將軍七

天大將軍九 天大將軍一〇 天大將軍西增一

・天倉六星(鯨座)

天倉一 天倉二 天倉三 天倉四 天倉五

・胃宿三星(牡羊座)

胃宿一 胃宿三 胃宿東增三

・大陵八星(ペルセウス座)

大陵二 大陵三 大陵四 大陵五 大陵六 大陵七 大陵西增一三

・天船九星(ペルセウス座)

天船一 天船二 天船三 天船五 天船七

・積水一星(ペルセウス座)

積水 天廩四星(牡牛座)

・天囷十三星(鯨座)

天囷一 天囷三 天囷五 天囷六 天囷七 天囷八 天囷九

・昂宿七星(牡牛座)

昂一 昂六 昂七

・卷舌六星(ペルセウス座)

卷舌一 卷舌二 卷舌三 卷舌四

・附路一星(カシオペア座)

附路

・土司空一星(鯨座)

土司空

・右更五星(魚座)

右更二 右更三 右更四

・ペルセウス座・三角座)

・芻藁六星(鯨座)

芻藁一 芻藁北増二

・天苑十六星(エリダヌス座)

天苑一 天苑三 天苑四 天苑五 天苑六 天苑七 天苑九

天苑一〇 天苑一一 天苑一三 天苑西増九 天苑南増四

・畢宿八星(牡牛座)

畢宿一 畢宿二 畢宿三 畢宿四 畢宿五 畢宿六 畢宿八

畢宿南増七

・天高四星(牡牛座)

天高

・諸王六星(牡牛座)

諸王二

・五車五星(駁者座・牡牛座)

五車一 五車二 五車三 五車四 五車五 五車西増八

・天潢五星(駁者座)

天潢四 天潢五

・天関一星(牡牛座)

天関

・九州殊口六星(エリダヌス座)

九州殊口二 九州殊口三 九州殊口四 九州殊口西増四

九州殊口内増一 九州殊口内増八

・参旗九星(オリオン座)

参旗五 参旗六 参旗七 参旗八

・九游九星(エリダヌス座)

九游二 九游八 九游西増四

・天園十三星(エリダヌス座)

天園一〇 天園一二 天園一三

・觜宿三星(オリオン座)

觜宿一

・司怪四星(双子座)

司怪二

・座旗九星(駁者座)

座旗二 座旗五 座旗六 座旗七 座旗八 座旗東増六

座旗東増七

・参宿七星(オリオン座)

参宿一 参宿二 参宿三 参宿四 参宿五 参宿六 参宿七

参宿東増二六 参宿東増二八 参宿西増三 参宿北増一

・玉井四星(エリダヌス座)

玉井三

・軍井四星(兔座)

軍井二 軍井三

・屏二星(兔座)

屏一 屏二

・厠四星(兔座)

厠一 厠二 厠三 厠四 厠北増五 厠北増六

○南方七宿

・井宿八星(双子座)

井宿一 井宿二 井宿三 井宿四 井宿五 井宿六 井宿七

・鉞一星(双子座)

鉞

・水府四星(オリオン座)

水府一 水府二

・天鐔(樽)三星(双子座)

天鐔二

・五諸侯五星(双子座)

五諸侯一 五諸侯三

・北河三星(双子座)

北河二 北河三 北河北増一

北河北増二

・積薪一星(双子座)

積薪

・四瀆四星(双子座・一角獸座)

四瀆一 四瀆三 四瀆四

・南河三星(小犬座)

南河二 南河三 南河東増八

・闕邱(丘)二星(一角獸座)

闕邱一

・軍市六星(大犬座)

軍市一 軍市五

- ・野雞(鶏) 一星(大大座)
- 野雞
- ・丈人二星(鳩座)
- 丈人一
- ・孫二星(鳩座)
- 孫一 孫北増一 孫北増四
- ・弧矢九星(大大座・船尾座)
- 弧矢一 弧矢二 弧矢五 弧矢七 弧矢八 弧矢九
- ・弧矢南増二二 弧矢南増二三 弧矢北増一五 弧矢内増一九
- ・鬼宿四星(蟹座)
- 鬼宿一 鬼宿三 鬼宿四
- ・外厨六星(海蛇座)
- 外厨一 外厨二 外厨西増二 外厨南増二二 外厨南増一六
- ・柳宿八星(海蛇座)
- 柳宿一 柳宿二 柳宿四 柳宿五 柳宿六 柳宿八
- ・柳宿西増一〇 柳宿北増二
- ・星宿七星(海蛇座)
- 星宿一 星宿二 星宿三 星宿四
- ・天相三星(六分儀座)
- 天相二
- ・軒轅十七星(山猫座・翻子座)
- 軒轅一 軒轅二 軒轅三 軒轅四 軒轅七 軒轅八
- 軒轅九 軒轅一〇 軒轅一一 軒轅一二 軒轅一三 軒轅一四
- 軒轅一五 軒轅一六
- 軒轅南増三八
- ・張宿六星(海蛇座)
- 張宿一 張宿二 張宿三 張宿五

- ・翼宿二十二星(コップ座・海蛇座)
- 翼宿一 翼宿二 翼宿三 翼宿五 翼宿七 翼宿一六
- ・軫宿四星(鳥座)
- 軫宿一 軫宿二 軫宿三 軫宿四
- ・右轄一星(鳥座)
- 右轄
- ・左轄一星(鳥座)
- 左轄
- ・青邱(丘) 七星(海蛇座)
- 青邱一 青邱五
- ◎南天星
- ・鶴十二星(つる座)
- 鶴二
- ・火(花) 鳥十星(鳳凰座)
- 火鳥六

伊能忠敬測量隊が観測した星(星座)について、「北極高度測量記」(享和二年識)や「恒星経緯表」(寛政九年)、「恒星経緯度」(文化七年)、「恒星南北視高度」(享和三年)「恒星表」(文化十年)などの伊能忠敬自筆の記録を基にして調査してみた。

それによると、百八十六星座、六百四十一星も記されていた。星座の内訳は、紫微垣二四、太微垣一〇、天市垣一四、東方七宿二七、北方七宿四一、西方七宿三九、南方七宿三一で、星の内訳は、紫微垣八七、太微垣二八、天市垣六二、東方七宿六七、北方七宿一四一、西方七宿一五四、南方七宿一〇二となっている。(調査漏れがあるかもしれない)

次に古くから親しまれ、知られてきた星(星座)の中国名と西洋名の同定について記してみよう。

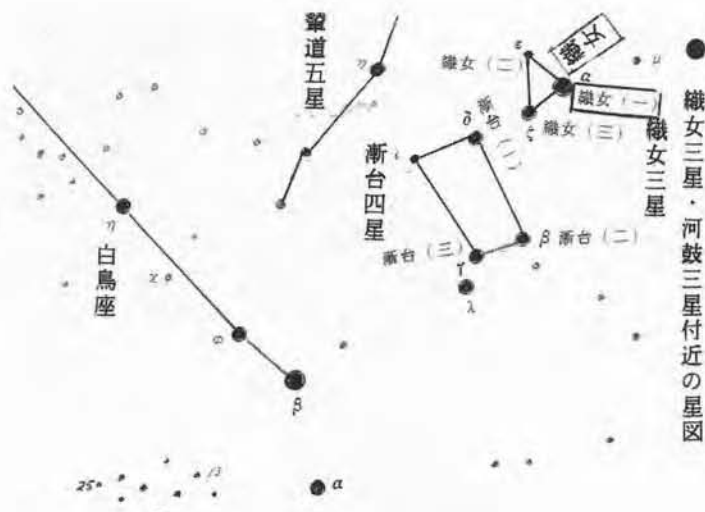
- ①北極星(小熊座、勾陳一)
- 小熊座の α 星(α UMi、ポラリス)、すなわち北極星は中国名で

「勾陳一」という。小柄杓の七個の β (コカブ) γ (フェルカド) η 、 ϵ 、 δ (イルズン) α (ボラリス)の星のなかの一つで、北極近くにある。

②三つ星(オリオン座、参宿一・二・三)

「三つ星」は、二十八宿の第二一番目の「参宿」のなかの三星。参とは、オリオン座の三つ星からきていて、白虎の胸にあたる。

この星座のなかで目立って明るい星が三つ星で、西(右)端から東



へ参宿三(δ Ori, ミンタカ)参宿二(ϵ Ori, アルニラム)参宿一(ζ Ori, アルニタク)という。参宿は、このほか参宿四(α Ori, ベデルギウス)参宿五(γ Ori, ベラトリックス)参宿六(κ Ori, サイフ)参宿七(β Ori, リゲル)から成っていて、不等辺四角形をしている。

③やまがた星・W形星(カシオペア座、王良一・四、策、閣道二・三)北極星をへだてて北斗七星と相対して、五つ星が少しゆがんだW形

をしているのがカシオペア座の「やまがた星」である。東端から王良一(β Cas, カーフ)王良四(α Cas, スケダル)策(γ Cas)閣道三(δ Cas, ルクバー)閣道二(ϵ Cas)という。

④牽牛星・彦星(鷲座、河鼓二)

鷲座のアルタイル(α Aql)は、七夕説の「彦星」「牽牛星」といい、中国名で「河鼓二」と呼ばれている。

⑤織女(琴座、織女一)

北天の白鳥座とヘルクレス座との中間に位置し、銀河のほとりにある琴座のベガ(α Lyr)は、鷲座の牽牛星とともに七夕説の「織女」として知られていて、中国名で「織女一」という。

(本稿了)

(さくまたつお・伊能忠敬研究家)

忠敬談話室だより

お便りから

■伊能隆男さん 浦安市

先日作家の山本一力先生とお話している際に、伊能忠敬の話となり、山本先生も「忠敬さん」の生き方には大変ご興味をお持ちでした。一度「忠敬さん」に関する講演などして戴きましたら興味深いお話しが聞けるかも知れません。

■今村恵二さん 白井市

三月二十八日、日帰りバスツアーでお江戸五大桜めぐりに行ってまいりました。上野公園に始まり、隅田川お花見クルーズで日の出桟橋へ、芝公園、靖国神社、千鳥ヶ淵とまわり、桜、さくら、サクラを満喫した一日でした。

■大沼 晃さん 藤沢市

古代歴史の勉強に熱中しており、吉川弘文館「日本史年表・地図」とでらしながら「古代よりの伝言」角川文庫八木莊司著を読んでいきます。

■海保英之さん 千葉県横芝光町

町村合併と合併直後の混乱期への対応や母親の介護など大変でした。しかし、この度役場を退職致しましたので、また研究会の行事にも参加させていただきます。

■川上 清さん 水戸市

茨城県内の「美しい日本の歩きたくなる道ウォーク」北茨城、常陸大田の二大会を続けて実施します。北茨城は八年前伊能ウォークで通った道です。

■神戸信和さん 東京都中野区

この度の伊能洋、陽子ご夫妻紺綬褒章受章誠にお芽出度うございます。ご夫妻の並々ならぬご盡力により伊能忠敬先生の貴重な史・資料が伊能忠敬記念館に寄贈されたことは大変嬉しく存じます。

■齊藤サダさん 函館市

伊能先生奥様おめでとうございます。ますます御健祥にて御活躍下さいませ。安藤様陽子様刊行おめでとうございます。48号大図総覧の地名と景観、星塾先生の健筆拝読させていただきました。特に函館から近いこともあり室蘭、礼文華の項は興味を深めるものがありました。かつて室蘭に「伊能橋」があることも耳にしたことがありました。

■新沢義博さん 東京都台東区

忠敬さんゆかりの地に住んで五年が経過しようとしています。都心に近く、四季の隅田川を堪能しております。

■辻本元博さん 堺市

5月21日幕張メッセで「伊能忠敬の山島方位記に基づく十九世紀初頭の日本の地磁気偏角の解析」の論文を日本地球惑星連合07年大会で発表しました。また一歩前進です。忠敬の測量データからいろいろなことが分り、永遠に活用できるデータを解析しております。伊能図の傾き原因の研究にも一石を投じることができればと思います。

「提言」各地での市町村誌等引用例での列挙につ

いて前から思っていることですが、前号の「正月不知」でも改めて思い知らされました。

①各地で調査中に自治体の歴史を記した市町村誌や郷土史家による著作には佐久間達夫氏校注の伊能忠敬測量日記からの引用に遭遇することが重なっており、測量日記等の何に付いてどのように触れているかということも注意して列挙してゆく必要性を感じております。

②知り得た測量地点等の具体的位置に付いても同様です。止宿の具体的位置やその後現代迄の間に変化した旧の海岸線の様子等。

「伊能図に学ぶ」に掲載分の市町村誌は長崎県下（これはもしかしたら多分入江様関係かなと思うのですが）と高知県下に限られております。

これら以外全国には相当ありますので皆が互いに遭遇したら都度忘れずに索引として列挙するとかの頁を設けておく必要を感じております。蓄積したら例えば伊能忠敬研究の索引集と合体した別冊索引集としては如何でしょうか。小生が今すぐ思い出すものでは、島根県の旧島根町、秋田県若美町など。

（編集部・検討課題のひとつです）

■直江泰子さん 筑西市

伊能洋様陽子様御授賞御祝い申し上げます。永年の御努力の賜と存じます。安藤様、研究会の皆様方のお力あつてのこと、お喜び申し上げます。御盛会を御祈り致します。

■成家淑子さん 香取市

去る五月十七日「伊能忠敬を偲ぶ会」が香取市

牧野観福寺で行われました。これは一九三三年に佐原町(当時)が命日に遺髪など埋葬されている同寺で墓前祭を始め、以後ずっと続けています。当日は雨のため本堂で読経いたしました。

■野田茂生さん 大野城市

ボランティア的に始めたカルチャーセンターで各地の「街道めぐり」も六年目に入りました。古希をすぎ体力的にやゝ負担に感じるようになっていくところです。

■馬場良平さん 武雄市

随分迷いましたが思い切って上京することにしました(総会に出席)。この機会に佐原や深川から浅草間を歩いてみたいと思っております。

■原田照男さん 神戸市

だんだんと足腰が弱ってきたようで、何とか元氣を出そうとこの六月に第九発祥の地鳴戸で「第九演奏会」に参加し久しぶりに唱ってくる予定です。そうそう春の叙勲で瑞宝賞を授与され何年ぶりの東京へも行ってきました。

(編集部・授賞おめでとう)ございます。次号で報告をお待ち下さい。

■平川定美さん 佐世保市

六月末でようやく梅雨は明けてしまい、このままでは水不足も心配されましたが、七月になつてずつと雨続き。大雨洪水警報とやらで慢性的な水不足に悩む我が佐世保もホッとしている様です。

6月30日は九州支部の例会でした。総会報

告と菱山剛秀氏、永尾正剛氏、國重正樹氏の研究発表に大図総覧の展覧が出来まして、とても有意義でした。秋の研修旅行は「島原市内の伊能測量隊の足跡」訪ねる予定です。

(編集部・例会の模様など次号で報告します)

■平野幸彦さん 札幌市

五月中旬を過ぎ、東京は日増しに暖かい季節に移っていると思いますが、本道は、一昨日から全般的に低温の日が続く、札幌は最高温度10度、オホーツク地域の滝上町では、19年ぶりの降雪を記録し、同町のピンク色の芝桜も白い雪に驚いています。その後、青空に恵まれ、観光の花として今月一杯元氣に咲いてくれるようなので、一安心です。

この度の伊能洋様の紺綬褒章授章祝賀会が開催されると知りました。この慶賀を契機として、忠敬先生の偉業が更に国内外に普及されますよう、心からお祈り致しております。富岡八幡宮には、たまたま、10年前に出張の折り立ち寄ったことがあります。

先日、送付いただいた第48号ですが、とりわけ星楚先生の「伊能大図総覧の地名と景観」、井口先生の「今井八九郎の『室蘭図』」、佐久間先生の「未完の天文暦学者伊能忠誨」、伊藤栄子先生の「榎本武揚文書解説余話」を中心に興味深く読ませていただき、諸先生方の豊富で卓抜な識見に感銘しております。

■廣嶋憲一郎さん 日野市

伊能様ご夫妻の受賞を心から喜んでおります。

私は千葉県松戸市の聖徳大学で教職を目指す学生の指導を行っています。社会科学教育法では必ず「伊能忠敬と日本地図」を取り上げて授業を行うようにしています。

■藤岡健夫さん 横浜市

懸案の忠敬関係書籍地図等三十余冊は、小生の故郷、潮来市立図書館(潮来市は香取市佐原と利根川を境に隣接しています)に寄贈して喜ばれました。

■吉田一さん 東京都練馬区

伊能夫妻の受賞は二人の永年にわたる努力の結果だと思えます。とくに陽子さんそして安藤由紀子さんが丹念に持続したエネルギーによることが大でしょう。ごくろうさまを心から言いたいと思っています。伊能忠敬の果した仕事内容もさることながらその生きかたをふくめればわたしへも痛烈な刺激となりますが、渡辺一郎さんをはじめ「研究会」の片々の支えがなければ現在はないでしょう。ありがたいものです。

日々の話題

■受贈図書など

□伊能忠敬記念館年報第8号

伊能洋家から資料寄贈が行われ、以前に寄贈された伊能淳家資料と併せて伊能三郎衛門家の資料の大半は記念館に収蔵された。

報告 佐原村の屋敷地変遷について 椎名和宏

□香取民衆史10 小島一仁さん

佐原・永沢治郎右衛門家覚書

佐原の名家として知られていた永沢本家の家は、途中から実質的には伊能本家の力によって引きつがれていたようです。

香取民衆史 10

香取歴史教育者協議会

□源空寺墓碑銘・植田浩一さん

伊能忠敬墓碑銘

拓本コピー

原本は『伊能忠敬研究』34号。忠敬の墓塔は、子の景敬が、忠敬の九州測量中に死去してしまつたので孫の忠誨によって文政六年四月十四日に建てられた。(植田さん手製の拓本写本)

□町絵図・村絵図の世界―絵図の時代・江戸時代―東北歴史博物館

武川芳男さん

影法師



影法師

□早稲田大学図書館蔵の伊能図について

同館紀要54号抜刷 藤原秀之さんより

一 中 図 標題・大日本天文測量分間絵図

① 256 × 217 cm 表紙「伊能東河測量」

② 258 × 163 cm 表紙「伊能東河先生大日本天文測量分間絵図」

寛政十一年・享和元年

紙本彩色、針穴本

二 小 図 標題・沿海地図

① 256 × 211 cm

紙本彩色

三 大 図 標題・海岸要地之図 武蔵・相模・安房・上総・下総 甲乙二鋪 《新発見》

① 138 × 117 cm

② 117 × 168 cm

紙本彩色、針穴本

四 伊能図写本

①「豆相武房総沿海図」 筑波大学図書館蔵

②「武相豆房総海傍之図」 明治大学図書館蔵

なかなかの力作です。6月に有志の皆さんが調査訪問をしました。

調査訪問をしました。

■八王子夢美術館 電話042・621・6777

7・20〜9・17 ますむらひろしの世界展

9・28〜11・25 ポップ・アート

12・7〜2・3 林静一展

■「地図展2007 in 富山」

10月18日(木)〜21日(日)

富山県民会館

■香取市で「ラジオ深夜便のついで」

深夜便アンカーのトークサロン

10月6日(土) 忠敬さんが出演?

■科学史学校案内 首藤郁夫さん

来年08年3月22日(土) 中村士先生

天文方高橋至時・その生涯、業績と影響

問合せ・国立科学博物館分館

電話03・3364・7103(月〜金)

国立科学博物館「日本館」オープンから

日本館一階南翼には天球儀地球儀のほか望遠鏡なども展示されております。新館二階の「科学と技術の歩み」では「天文と測量」のコーナーがあります。おついでにの節ごらんいただけばと存じご案内申し上げます。

■「久美浜湾絵図」写本が記念館に!



松田昭二さん

前号「松江近体詩の久美浜湾絵図」に早速反応がありました。伊能記念館にこの絵図写本が残されていることが紺野学芸員からの連絡で判明しました。小西伯熙が直接忠敬に渡したものに間違いはないと考えています。夢のようなお知らせでした。絵図に何か書き留めたものや参考記述を訊ねましたが特記はないとのことでした。

お知らせ

■榎本武揚百回忌

(続・前48号67頁)

10月20日(土)

吉祥寺・東京都文京区

法要

13:00 記念講演会 童門冬二

懇話会

18:00 霞会館 要会費

資料請求等は ☎042・424・4568 福田まで

■新入会員です。どうぞよろしく。

・猪原紘太さん 東京都杉並区

東京カートグラフィック代表取締役

ソフト「地図太郎」は身近な地域の地図や航空写真を背景に、地域や個人の情報を表示したり、重ね合わせたりする簡単な地理情報システムです。歩いたコースが地図上に表示できます。

☎03・5303・8221

・岡部隆男さん 郡山市 専修学校教育

職業柄、生涯学習には強い関心を持っており、特に、生涯学習の偉大な先駆者である伊能忠敬には以前から興味を惹かれておりました。当地福島県の専修学校各種学校連合会でも「生涯学習の日」を設けて会員校がキャンペーンを実施できないかと考えておりました。そして「生涯学習の日」にふさわしいのが、忠敬が51歳で32歳の高橋至時に入門した日と考えています。

以前、江戸東京博物館で、伊能忠敬展が開催されたとき、学芸員の方に調査を依頼したのですが、不明でした。何か、手がかりがありましたら、ご教授いただければ幸いに存じます。も

し、入門の日かそれに関連した日がわかれば、それでも良いと考えております。

来年は、福島県で生涯学習フェスティバル(まなびピア)が開催されますので、そのときに発表できればと考えております。

カレッジは商業実務系の専門学校で、現在約三百名の学生が在籍しております。先月は、120名の学生が献血に協力してくれました。献血協力は、20年近く続いており、昨年厚生労働大臣から感謝状をいただきました。300回以上献血協力の教員もあり、血気盛んな専門学校です。ちなみに私も64回献血をしております。

編集余話

皆既月食 8月28日はお天気がよければ、月が欠けて昇るのが見られるそうです。東京では夕方6時9分、43分後に皆既が始まり、9時23分まで。測量日記にはかなりの月食情報があります。忠敬さんの情報源は？ 今号の佐久間さん「伊能隊が観測した星」には一八六星座、六四一星が記されています。天文、暦など日本、中国、西洋の知識に触れ、賢明に吸収し実現に最大の努力をしていました。

病家須知(びようかすち) 今年のブックフェアに農文協「病家須知」現代語訳がありました。書名は病人のいる家では知っておくべきことの意味。江戸後期の医者平野重誠(1790~1867)の著書です。「江戸期ニッポンは予防医学

の最先端国家だった」「医者三分、看病七分」。

今号の佐久間さん「伊能家蔵書は五千冊」にありました。本草、医療の荒第八に「用薬須知」前後二篇七冊。あいにくと著者名はわかりませんが長男景敬が作成した目録に存在した事実です。江戸末期の往来者の売弘書肆に「下総佐原正文堂浅野利兵衛」とあります。全国に知られた大手書店でした。(江戸の読書熱・鈴木俊幸著)五千冊の伊能家蔵書の一部は正文堂書店から購入もあるのかは微妙です。古書籍類は六十六部講の存在が関係か。当時では確実な全国ネットワーク？ここにも時代の先端情報が存在しました。

加州の忠敬さんと郡蔵さん

「わたしの原稿、この秋には、読んでいただけたかも知れません。あらためてご連絡させていただきます。皆様にはよろしくお伝えくださいませ。」作家・早瀬徹さん

御礼 新しい関心はしばしば異質の出会いから生れます。毎号の誌面には皆さまの探究心、向学心が輝き、一号に十万字近くを有難く頂戴して参りました。現代は市場とは違う論理で動く共助の拡充や社会還元を豊かにする必要が求められています。特に晩節は価値判断を大切にしなければ！会員の諸賢兄弟はじめご支援いただいた関係者の皆さま、有難うございました。

(福田弘行)

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方にはどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

発表誌 原則として年四回 64頁

ー予定ー

第50号 締切 9月 末 発行 11月

②例会・見学会の開催

第51号 締切 12月 末 発行 2月

③忠敬関連イベントの主催または共催

第52号 締切 3月 末 発行 5月

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄には専門、趣味、入会の動機など御意見を書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万元を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをお送りします。

(04年8月事務所は新宿区下宮比町から移転)

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

Tel・Fax

03-3466-9752

事務局メール junko-sz@jcom.home.ne.jp

(07年8月よりアドレスが変更しました)

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

投稿規定 会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任。手書き、FD、CDなど形式自由です。一頁は二段組31字×26行(400字詰用紙4枚分)、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等(返却します)添付可。併せて、話題、各種情報、近況などお便りをお待ちしています。

伊能忠敬研究会のホームページ

ホームページは秋葉武晃さんの担当です。 流水着岸は温暖化の影響?

<http://inoh-tadataka.org/>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事です。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など御覧いただけます。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田新編集長が担当です。会報原稿などはこちらへ直信。

<http://www.tt.rim.or.jp/~koko>

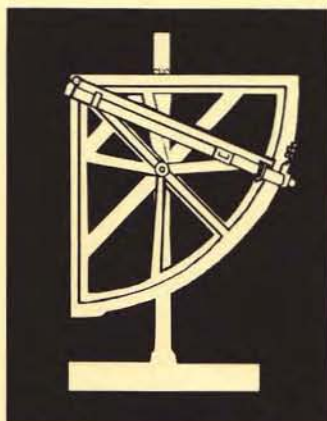
編集後記

中越沖地震被災お見舞い。ご無事を願っています。六月の北見、網走は纏めた春がにぎやか。蝦夷春せみの大合唱。蝦夷山桜、芝桜など一斉開花は文字通り百花繚乱。湖畔「第二湖口」はサロマ湖とオホーツク海を結ぶ幅30位の小さな海道。「さんま?」の声に橋から覗くと大ぶりのさんまが群れて泳ぐ。自然を守る知恵はこの海道に。アファガンの心(1月9日朝日新聞)「子らに希望託す映画から『大人になったら何になる?』少年が答える。『心臓病を治す医者になる』。どうして?」アファガン人の心は戦争で壊されたから。江戸しぐさの越川さん。仕草ではなく思草。銘柄やブランド評価には失敗がある。江戸はしぐさで選べば失敗が少ない。自分の努力や才覚で築き上げた心ばえ、個性や特技を評価。今でも内面が感じ取れる美しい思草は忠敬さんに!『ほのぼのと夜明けに輝く忠敬忌』◇忠敬旧宅の発掘調査では新事実は如何に◇「離別一札の事」今般私方勝手合を以て離職然ル上縁祖如件。潮時到来、永年のご懇情に多謝深謝です。気鋭の鈴木さん前田さんに増してのご支援ご協力を是非お願いします。◇天の賜もの忠敬さんと同時期は俳人田上菊舎『雲霞呑みつゝ越えん菊の山道』(F)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.49 2007



NEWS

The Celebration has held at Tomioka-Hachimangu Shrine
 Report of the General Meeting 2007
 Inaugural Address of New Secretary-General
 Greet of New Chief Editor
 Descendants of The Jimbos Met Statue of Tadataka Inoh
 Exhibition of "Tadataka & Shigetomi" will Come True
 My Travel Guide :An Invitation to Sado
 Movie "Horumaika"
 Exhibitions of Large-scale Inoh Maps in Asahikawa
 Issue "Working Guide in Ibaragi"

FROM VISITORS' REGESTERS

TOPICS 5,000 Books of The Inohs Collection

Place Names and Landscapes in "*Inoh Daizu Soran*" (3)
 Report of the Investigation about "The Copy of Large-Scale
 Inoh Map" in the Japan Coast Guard (2)

Book Street Study of the Age of Civil War in Sasebo
 My Photo Sketches on the Trip
 Epitaph of Aoyagi Tanenobu and his wife

Imai Hachikuro's "*Map of Muroan*" (2)

ARTICLES An Old Book about Tadataka Inoh (1)

Inoh Tadataka as a Pioneer of Culture (6)

The Hamataku Miyauchi Family Documents (3)

Personal Connections of "Wasan" (1)

The Stars Measured by Inoh Survey Team (2)

MEETING ROOM

Letters from Members Editor's Anecdotes

Daily Topics and Informations

	1
Editorial Department	2
Suzuki Junko	4
Maeda Koko	5
Inoh Yoko	6
Inoh Memorial Museum	6
Ishikawa Susumu	7
(Yamagishi Toshio)	9
(Yasukawa Yoshimi)	9
Kawakami Kiyoshi	25
Inoh Yoko	10
Sakuma Tatsuo	12
Hoshino Yoshihisa	21
Suzuki Junko	26
Hirakawa Sadami	30
Noda Shigeo	31
Kunishige Masaki	32
Iguchi Toshio	33
Akima Minoru	38
Miyauchi Satoshi	46
Miyauchi Satoshi	52
Ando Yukiko	54
Sakuma Tatsuo	62
Fukuda Hiroyuki	72
Editorial Department	69

Edited and Published

by

THE INOH TADATAKA SOCIETY